

八重山諸島の狂言資料抄

飯 田 泰 彦

八重山の島々で狂言は祭祀や祝儀の場で演じられてきた。狂言は八重山地域において広くキョングンと呼称されるが、狂言のキョーという長音が撥音化して、キョングンと転訛したのである。また、波照間島ではコンギー、与那国島ではキングイなど、地域によって転訛のしかたも異なっている。

矢野輝雄氏は沖縄芸能史において、狂言という言葉が時代と地域に応じて「能狂言」「組踊」「滑稽狂言」「演劇一般」「地狂言」「八重山の狂言」と、さまざまな意味に使用されてきたことを述べている。そして、八重山の狂言について「神事に結びつく厳粛なものと、そうでない滑稽を主としたもの」とがあり、歌謡以外の語り物やセリフなどが狂言として把握され、文学的にも独自のジャンルを形成している」と説明する（『沖縄の狂言』『組踊を聴く』127頁）。特に「厳粛なもの」を「例狂言」、「滑稽を主とした」狂言を「笑し狂言」と呼んでいる。後者は祭祀において、奉納芸能の核として意図的に仕組まれ、儀礼的な役割を果たしている。

さらに矢野氏は、八重山の狂言が「かつて沖縄本島で行われたような多彩な地狂言の世界をとどめており、そこでは土着の神事芸能としての地狂言から、本島の大和狂言の影響を受けて作られた滑稽狂言、あるいは組踊や歌舞伎などの商業演劇の影響を受けて作られた狂言まで、狂言と名のつく芸能の種々相を展開している」（『前掲書』148頁）のを指摘している。このことは竹富島の種子取祭で奉納される芸能の数々をみただけでも感じることができるだろう。

この八重山における多彩な狂言の個々の演目に注目し、内容や来歴を明らかにすることによって、沖縄芸能史が新たに開かれるにちがいない。本資料は八重山諸島で演じられる、狂言の全容を俯瞰するため、その足がかりとして作成した覚書である。刊行物を中心に、それぞれの演目にスポットをあてた解説を、私見により引用した。本稿を「狂言資料抄」とした所以は、これ

を前提としているからである。

原則として、地域別に演目のタイトルを五十音順に並べた。地域別にしたのは、地域によって狂言の位相に差異がみられるからである。例えば、一般に組踊と狂言は区別して演じられる傾向があるが、竹富島では組踊も近代演劇も含めて、演劇全般が狂言という同じ範疇にあるのである。与那国島では組踊を担当するのは組座で、狂言を担当するのは狂言座というようにはっきり区別されているが、竹富島ではどちらも狂言座が担うという違いがある。

また、「蛸取り狂言」などのように地域を隔てて同名異曲の演目があることや、「鍛冶工狂言」など同根の芸能であっても島々村々によって独自に展開したものも少なくない。同じ素材を扱っていてもやはり地域の嗜好が表われてくることを考慮するからである。これらの理由により地域別に分類したのである。

演目によっては、複数の解説が得られたものがある。その解説は発行年の若い順に配列した。島で暮らす人、演者、研究者など、それぞれの視点による解説は、作品の理解を助け、深い鑑賞の手引きにもなっている。

勿論、ここに挙げた他にも多数の演目がある。多くの場合、台本を持たず口立てで伝承されてきたゆえに、記録に留められることが少なかったのだろう。例狂言は祭祀の場で毎年繰り返し演じられているが、笑し狂言については、方言のわからない世代が現れて衰退している。笑し狂言が笑いを主眼とする台詞劇だけに、台詞の言葉がわからないとなれば、笑うに笑えないといった悲劇が待っている。以前、大田静男氏はそれを「瀕死の狂言」と表現した（『八重山の芸能』252頁）。狂言は今や風前の灯火の芸能なのだという。何とかして質量ともに豊かな八重山諸島の狂言の世界を記録したいものである。忘れ去られた狂言の発掘作業は別の機会を持ちたい。

凡 例

- 本稿は、1「石垣市」、2「竹富町」、3「与那国町」からなる。原則として、それぞれ島ごとに村レベルの単位に分類した。現在のところ、村を限定できないものは、当該の島の項末尾に「〇〇島」としてまとめた。
- 村レベルにおいて、演目は《 》で括り、タイトルの五十音順に配列した。

演目によっては同じものであっても、異名や通称にバリエーションがみられるが、逐一指示していないことを予め断っておく。

- 出典は、著者（编者）・書名・発行年・出版社を記した。書名は『 』、発行年・出版社は〈 〉で括った。資料によっては必要に応じて情報を加えて記した。尚、公演用のパンフレットは〔パンフレット〕と注記し、新聞資料については便宜をはかり年月日を記した。

〔例〕

本田安次『南島探訪記』〈1962・明善堂書店〉

大田静男「琉狂言—琉球芸能の新視点—」『文学』季刊 第9巻 第3号〈1998・岩波書店〉

『第3回民俗芸能振興大会〔パンフレット〕』〈1984〉

高嶺方祐「島々の芸能—狂言と舞踊—」『八重山毎日新聞』1997. 9. 6

- 演目によっては複数の解説を収集することができたので、それらについては発行年の若い順に並べた。しかし、なかには初出にあたることのできなかったものもあるので配列に弱冠の問題が残る。
- * 尚、資料収集にあたり、宮良安彦氏から貴重な助言をいただいた。石垣島川平村の「カタバルのコーフフォース狂言」「初番」「しるすくい狂言」「芋掘り狂言」「島廻るい狂言」「福ぬ狂言」、鳩間島の「ピラ狂言」においては、未発表のノートを提供していただいた。これらについては発行年の代わりに〈宮良安彦ノート〉と注記した。ここに記して感謝申し上げる。

1、石垣市

石垣島伊原間村

《シチ狂言》

- ・ ミロクガナシの行列行事が終わると、本番の舞台行事となる。座開きは、伊原間独特の狂言からはじまった。

○シチ狂言「バヌド クヌムラヌ ユーPムチカナユ キユヌ ハイピユルナグユバウイシキラレウルシキンナ バンピトルセ ナラナハリ シチブドリキヨンギンヤ ムラヌバハハル ビヒドン ミヒドン アチマリワリ ウチソダンヤシ ケラシ ギンミシ マチリユ トリムチ タボリテシサリルト ト。」訳（私がこの村の世持職加那でございます。今日の佳き日に御用をおおせつけられておりますけれど私一人では（催事）成りませんので、節踊りや狂言は村の若者である男女が集って相談し全員で吟味し祭事を取りもっていきたいと思うのです。）

狂言がすむと、舟ひきの歌がはじまる。

【伊原間公民館『伊原間村誌』〈1993・伊原間公民館〉】

石垣島川平村

《カタバルのコーフフォース狂言》

- ・ ^{ケダムルヤー}慶田盛家では親の生年祝を迎え、兄弟三人が祝いの準備をする。フツチャー（長男）は、魚や蛸を捕りに、マツツァー（次男）は猪を捕りに行き、サンダー（三男）は、買い物に出かける。サンダーが買い物に行く途中、カタバル（名蔵小橋一帯）で買う品を確めるが、最後の一品がどうしても読めない。困り果てたサンダーは、近くで釣りをしているフシュマイ（老人）に尋ねてみる。ところがフシュマイは字が読めない。しかし、そうとはいえ、その場をごまかそうとする。そこへ子供が来て、いとも簡単に読んでしまう。サンダーは貴重な時間をつぶしたと、フシュマイを罵る。フシュマイは、今からでも遅くない、字を習わなくてはと思う。

仕事を果たしたフッチャー、マツツァー、サンダーの三人は、各自の獲物を自慢し、祝いの場へと向かう。

【創立二十周年記念誌編集委員会『琉球大学八重山芸能研究会創立二十周年記念 八重山芸能と私たち』(1986・琉球大学八重山芸能研究会創立二十周年記念誌編集委員会)】

・親の八十五歳の生年祝いに兄弟三人が準備にかかる。長男は漁に行き、次男は猪を捕獲しに行く。三男は長男からの命令で街に買い物に出かける。途中、潟原でもう一度、購入する品の名前を確認するため膳部帳を開いて読んでみた。ところが一つだけ読めない字がある。いくら思い出そうとしても思い出せない。そこで恥を忍んで釣糸を垂れていた御主前(老爺)に文字の読み方の教えを願った。御主前は自分は勉強が一番であったと自慢するがその字が読めない。御主前はこれは今流行の字だと言い知ったかぶりをする。そこへ通りかかった子供が文字をすらすらと読んでしまう。御主前は恥じをかき、三男には罵られこれからは好きな釣りもやめるといい、釣竿を折り捨て、孫から勉強を習おうといいながらしょんぼりと帰る。三男は無事買物を済まして帰り、長男は亀を捕らえ、次男は猪の代りに鶴を撃って帰ってくる。三人は獲物を自慢し、踊りながら幕に入る。狂言「末広がり」の内容を含みながら無知を戒め、親に孝行を尽くす教訓的内容である。

ところで、古見の亀組では亀は女神となり崇められているのに、この狂言では亀は世果報の物として、鶴とともに祝宴の料理に供されるとなっている。寿命が長くめでたいものの象徴である亀を捕らえ、鶴を撃ち屠るという狂言は鶴亀を食することによって長寿の靈魂を胎内に宿すということであろうか。ちなみに狂言の題名のコーフウとは「だいまようさぎ」という魚の名称で、フウオースとは「釣る」意味である。

【大田静男「琉狂言—琉球芸能の新視点—」『文学』季刊 第9巻 第3号(1998・岩波書店)】

・内容 ある一人の釣人が、潟原^{カタバル}(名蔵大橋附近)で、コーフを釣っていた。川平村では、結願祭には、色々な買物があるので、部落からその買物の役を

おおせつかって一人の若者が、四ヶの町への買物の途中のこと、潟原辺は、ちょうど半途なので一休みしつつ、買物帳を開いて、目を通して見た。ところが、どうしてもわからないものがあったので、若者は困りはて、村に引き返すこともできない。そのまま街へ出ようにも出られず、困りぬいているときに橋の上に釣人が一人見えたので、救いの神が現れたと喜び勇んで釣人のそばに行き、そのことを告げて、教えてもらった。ところがその釣人は全くの文盲であったが、若者は田舎者だからとのことで、いい加減に教えてやった。若者は釣人の言うことには合点がいかず、二人でおし問答をしているところへ、一人の学生らしい者が、そこを通ったので、その買物帳を見せてくれるよう頼んだところ、すらすらと買物帳を読んで聞かせたので、若者はその学生にお礼を言った。今度は、その釣人に向い、いい加減にもほどがある、全く似ても似つかないことを人に教えているので、若者と学生二人で、さんざん罵ってそこを去った。この釣人は、これには目がさめ孫ほども違う者から、さんざん恥をかかされたので、発奮して、今からでも遅くはない。さっそく家に帰ったら、今日から勉強するんだと心に誓い、自分の大事な釣具もおしげもなく釣竿も二つ三つに折り、釣道具一切を海に投げ捨てて、さっさと家に帰って勉強に励んだと言う狂言。

【宮良安彦「潟原ぬコーフほうしゃ狂言（島狂言）」〈宮良安彦ノート〉】

ショバンキョングン
《初番狂言》

• この狂言は、結願祭の時、当年の五穀の豊穰を祝い、来年の農作物の豊穰を祈願するため、毎年、ジーキョングン（例狂言）として奉納する狂言である。結願祭のジーキョングンは他に「芋掘狂言」「包丁狂言」があり、いずれも川平方言で演じられる特色のある狂言である。結願は、一ヶ年間に取れた諸作物（五穀）の穂花（初穂）を神に捧げ、来年の豊穰を祈願する祭祀である。その時に奉納する芸能も、その行事にふさわしい内容の芸能を奉納することになっている。それ故地狂言が伝わっている。その地狂言として伝わっているのが、初番狂言、芋掘狂言、包丁狂言である。

【宮良安彦「初番狂言」〈宮良安彦ノート〉】

《しるすくい狂言》

• 昔、村での祭祀やお祝いで、「シル」はぜひなくてはならない品物の一つであった。「シル」とは「シルサイ」と俗に呼ばれている海海老のこと。二人の若い女性は、この「シル」すくいの役目を引き受けたが、夜の海でもあるので、女達だけでは心細いので、どうしても男手が必要である。二人の女は考えた。村一番の女きちがい男の、男やもめを連れ出すことに意見が一致した。ところが寒い晩のことだから、いくら女きちがいと言っても、おいそれと簡単にはいかない。若い女性二人は、あの手この手で男を連れ出すことに成功した。それから舟に乗って、向う岸に着いて、「シル」をすくい、家に帰るまでの途々でのこっけいな仕草を演ずる狂言。

【宮良安彦「しるすくい狂言（島狂言）」〈宮良安彦ノート〉】

ハッコンプリ 《芋掘り狂言》

• 狂言「アッコン堀リィ」は、川平村年中行事最大の結願祭の奉納芸能であり、毎年行なうことから例の狂言として広く内外に知られている。内容も結願祭と深いかわりを持ち、素朴なユーモアを持った狂言である。（中略）若い女性二人が結願祭に供えるためのアッコン（唐芋）を堀りに行き、楽しく作業をする中に籠一杯にしてしまう。掘るには堀ったが、それを頭のにせて運ばねばならない。誰かそれを頭上まで持ち上げてくれる人はいないものかと人待ち顔のところへ、若い男が二人現われる。彼等も結願祭の肴としてウムズナー（小蛸）をとりに行くところである。

潮時を気にした男達は、彼女達の願いをきくべきかどうかで大いに迷う。しかし、女達のたくみな言いまわしに合って、結局は芋籠を持ち上げてしまう。祭事における村の男女のやりとりを巧みに描いた狂言である。

【八重山ひるぎの会『第3回 八重山民俗芸能の夕』〔パンフレット〕』（1979）】

• 最初に、スティナ・カカンを着け、両側に大きな耳のついたティール（籠）と、五十センチ位の木の棒をもった、ナベーマとブナレーが、結願祭に供えるハッコン（芋）を堀りに出てくる。二人は、楽しく歌を歌いつつ芋を掘り、

たちまち籠を一杯にしてしまう。女たちが、一杯になった籠を、頭の上にあげることができず、困っている時、アンツクを腰に下げ、結願祭のためウムツ（小蛸）を取りに行く途中の、コー二とヒラーが通りかかる。それを見て、女たちは、男に籠をのせてくれ、と頼む、潮時を気にしている男たちは、彼女たちの頼みをきくべきか、どうか迷う。しかし、彼女たちの巧みな言い回しにひっかかり、籠を頭にのせてやる。そして、仲良く四名で踊りながら帰る。

【創立二十周年記念誌編集委員会『琉球大学八重山芸能研究会創立二十周年記念 八重山芸能と私たち』（1986・琉球大学八重山芸能研究会創立二十周年記念誌編集委員会）】

・結願祭の早朝の出来事で、村の娘のふたりが、結願祭の神前に供へる芋の御初を掘りに行くが、芋があまりにも稔っているので、たちまちのうちに策いっぱいになった。その策を頭にのせるには、娘達ふたりだけでは無理なので、誰か牛繋ぎ人でも来て、手伝ってもらえないかと待っていたところ、ちょうど村から今日の結願祭の一番儀式に供えるべきウムツィ（こだこ）捕りのふたりの若者を見つけた。ふたりの若者は、急ぎ足で海へ向かって行く。娘達に呼び止められたふたりの若者は、芋を頭にのせてもらうように頼まれたが、ふたりの若者はウムツィ（こだこ）捕りには潮時の関係があるので、心は急ぐばかり。また、相手は若い娘であり若い者同志ゆっくり話したくないこともない。ふたりの若者はこれを決めかねていたが、けっきょく、娘達の芋策を頭にのせてやった。その代償として、娘達は、彼女たちの親たちが、夜の漁りで捕って来たウムツィ（こだこ）を与えることにして、結願祭の一番儀式に供えるべきウムツィ（こだこ）を無事得ることができた。

村祭りの芸能や舞踊などの配役やその役割りで村人たちが村祭りを楽しくやってきたことや、当時の村人たちの実生活がこの狂言でよくうかがえる。苦しい生活の中でも、その苦しさから抜け出して、祭祀の時だけは、自由に、おおらかに遊ぶことができたものである。

【宮良安彦「八重山諸島の狂言(2)」『八重山文化論叢一喜舎場永珣生誕百年記念論文集一』（1987・喜舎場永珣生誕百年記念事業期成会）】

・結願祭には掘り立てのふかし芋をおたけ神前に供える事になっている。

結願祭の早朝の出来事である。村娘二人がさそい合って朝露をふみながら神前に供える芋の初を掘りに行く。畑が隣合わせなので謡をうたいながら新開地の大きく実った芋を楽しく掘って居るうち、掘り過ぎて、ざるに山盛りになって頭にあげることが出来ません。娘二人は困ったなあと思いながらも、どうせ朝つなぎ（昔は野原で牛を一日三回移動して草を与える）の若者がどうせ見えるんだらうから其の時あげてもらうさといいながら若者が現れるのをまつ。

そこへ村の若者二人が急ぎ足で通る。（結願祭の頃、ウムチ〈小だこ〉が一番取れる時期である。そのウムチを結願祭の儀式に供えるのである。）

その大事な役目を村からおおせつかったのがこの若者二人である。潮時に間に合うかどうか心配しながら二人は大急ぎで海へ行くところを娘二人に呼び止められ、びっくりぎょうてん若者二人はおこる。

自分達は村から重大な責任をおせつかって急いで居るのに娘達がこんなに朝早く人をおどかすとは何事かとたんかをきる。

娘二人は若者にあまい声で兄さん達こそこんなに早く急いで、どこへ何をしに行かれるですかと言う。

若者二人はもちろん娘に心もひかれるが片時も急がないと潮時に間に合わない、今日の君達と話して居るひまは無いと、振り切って去ろうとする。娘二人は若者の行く先を知って居るので、そこで相談をもちかける。ゆうべ私達の父親達が底地の海から大きなあんつくの二杯ウムチを取って来てあるので、どうでしょう。私達の芋をやすやすと頭にあげてもらえば其のウムチを兄さん達二人にさし上げましょう。

若者二人は何時もだまされてばかり居るので半信半疑ながらも娘達の事だし男の意地で重い芋を頭にあげてやる。

あげたとたん、今の話はうそですよ。あげてもらってありがとうと言う。若者二人はかんかん怒って今度はばかりはぜったいに許さないと意気まく。

娘二人は今日は神様の事だし兄さん達をだましたりはしませんよ、今のは冗談ですよ、となだめる。

若者二人はやれやれと胸をなでおろす。

若者同志の事、何事もなかったように仲良く楽しく、謡い踊りながら家路につく。

【石垣市教育委員会『第12回 石垣市民俗芸能振興大会』〔パンフレット〕〈2003・石垣市〕】

《^{ハルマーイ}畠廻るい狂言》

・内容 しばらく畠にも行かないで、畠も荒れている筈だから、今日は格別御酒も肴も盛り沢山準備して行った。畠に着くと案の上、^{ママ}畠も荒れているので、主ぬ前（主人）はサンダー（下男）に言い聞かせる。「サンダーよ今日は特に御馳走もしてあげるから、よく働いてくれよ」。サンダーはいやへながら働いている内に腹がすいてきた。サンダーは仕事よりも持ってきた弁当のことが頭にこびりついて離れない。しばらくすると、主人から「さあよく働いてくれた。ここで弁当にしましょう」と言ったので、サンダーも大変喜び、待ちかねたと言わんばかりに、息もつかずに、次から次へと飲みほした。さあ大変。不断は主人と下男の間柄だから頭はあがらないが、酒の勢いで様相は一変。主人を呼ぶのに、呼びすてにして「ええ ペーちんよ いったあ はんしいぬ ちくてーる てんぷら 畠ぬ芋入りてーさや ペーちん」と言ったので主人も呼びすてにされたので、黙ってはいない。怒るのは当然。持っていた扇子でサンダーの頭をぱちん。サンダーも酒の勢いで、黙っていないで応酬。サンダーは怒った末「もうこの家には居りたくない。出て行く」と立って出て行こうとする。主人も下男に出て行かれては畠仕事にもさしつかえらると思っか、主人も冷静を取りもどし、「サンダーよ、主ぬ前（主人）はお前を憎んで殴ったんじゃないよ、お前を扇いでやるつもりでしたよ」と言ったので、サンダーも「主ぬ前さい わんね腹どう立ちようたる いたこうねえやびらんたんど」と二人とも、仲直りして又、元の通り働き出したという狂言である。

【宮良安彦「畠廻るい狂言（首里方言）」〈宮良安彦ノート〉】

《福ぬ狂言》

・主ぬ親の生年祝いにあたり、準備万端整っているが、只一つだけ不足しているのがある。それと云うのは、豚の内臓の肺臓で、これを買いにサンダーを街まで使いに出した。

街にさしかかると、主ぬ前から教えられた通り、「福（豚の肺臓のこと）ぬあら、買うやびら」を連呼して歩いた。これを聞いた商人が出て来て、サンダーを呼び止めて、今何と言っているのかと尋ねた。するとサンダーは、「福ぬあら買うやびら」と呼んで歩いていると答えた。商人は「福とは何のことですか」と尋ねた。サンダー曰く「主ぬ前のおっしゃるには“マッテンし マッカーラ”しているものだそうです」と答えた。商人は「それなら私のところにあります」とさっそく、福の掛軸を持ってきて見せた。「これがあんたのおっしゃる福ですよ」。サンダーは「いいえ、これはちがう」とはねつけた。商人はすかさず、軸物を拵げて「これがマッテンで、これがマッカーラですよ。これを掛けたら自ら踊りや狂言が出てきますよ」といろいろ説明する。これを聞いていたサンダーは、なるほどいいものだと思い、さっそく手元のお金を商人に払い、喜んで帰宅する。

サンダーが帰るのを告げると、主ぬ前も待ち兼ねていたので、「いやー御苦勞でした。それでその買い物は」と言った。サンダーは掛け軸を主人に見せる。主ぬ前はびっくりして「豚のフク（肺臓）を買いにわざわざやったのに、何たることだ。お祝いも今日のことだし、その掛け軸で何になるのか」と顔を真っ赤にして怒り出した。サンダーは主ぬ前の怒るのに一応尻ごみはしたが、そのことは心得ており、静かにこの福の軸物について、これが主ぬ前の言われたマッテンで、マッカーラですよと説明し、「これは普通の掛け軸とはちがい、これを掛けて置くと自ら踊りや狂言が出てきます」と言う。これを聞いた主ぬ前は、たいへん喜び「サンダーよ、たいへんよいものを買って来てくれた」と言う。主ぬ前は、さっそくサンダーがいったように、踊りや狂言がつぎからつぎへと出て満足する。この福祿寿の軸物を掛けて親の生年祝いを滞りなくすませたという狂言。

【宮良安彦「福ぬ狂言（首里方言）」〈宮良安彦ノート〉】

ポーザー
《包丁狂言》

・結願祭も迫り、大行事の料理人が川平にいないことから、四ヶ村のポーザー（包丁人、料理人）を迎えに行く。忙しさの中から結願祭のためならと一肌ぬいでやって来るポーザーに、とんでもない思い違いからさんざん嫌な思いをさせ、席を立たれる。とて、そのままでは祭りができぬとあって再び迎えに行く。川平方言と四ヶ村方言が交錯して、他所ではみられない趣きの「おかしさ」をつくり出している。

【八重山ひるぎの会『第1回 八重山民俗芸能の夕』〔パンフレット〕〈1976〉】

・結願祭も迫り、行事の料理人が川平にいないことから、四ヶ村のポーザー（包丁人、料理人）を迎えてくるが、料理用言の聞き違い思い違いから、さんざんな結果になるいきさつを、川平方言と四ヶ村方言を交錯させながら、コミカルな狂言に仕立ててある。

【『第3回民俗芸能振興大会』〔パンフレット〕〕〈1984・石垣市〉】

石垣島登野城村

チョウチョウ
《長長（警察署長と郵便局長）》

・第3回青年文化発表会で登野城青年会が青年会として初めてキョングンを披露したのです（中略）。指導者はトノスク（登野城）の有名なキョングンシャー富永実彦氏（65才）であります。

今回、披露された出しものは“長長（チョウチョウ）”。「仲の悪い郵便局の小使いと、警察署の小使いには、それぞれ娘と息子がいる。が、その娘と息子が結婚することになって、お互い郵便局長と、警察署長としてご対面！それから、てんやわんや……。」という、およそ二十分ほどの喜劇。もちろん、これをすべてシマムニ（島言葉）でやるのである。

【正芳「キョングン（狂言）の話」『月刊ゆう 第27号』〈1990・ミル出版〉】

《ピピジャー》

・登野城のチュルンガニーは妻のダルーのしりにしかれている情けない夫。

ある日、友人のマイトゥと道でばったり出会い、飲みにさそわれる。べろんべろんに酔い午前様で帰宅したチュルンガニは妻にしたたかばられ（たたかれ）、足をひもで縛られる。夕方、心配した友人マイトゥがダルーのいないころあいを見て様子を見にくると、チュルンガニはベそをかき、いじける。そこで悪賢いマイトゥは「俺にいい考えがある。」とチュルンガニをヤギに扮装させ、こうアドバイスするのである。どんなことがあっても「ンバー、ンバー」と言うんだよ、と。さて妻が帰ってくるが……。

【「うむっさ島声'91出演者紹介② 登野城青年会」『月刊ゆう 第45号』（1991・ミル出版）】

《マイとアッコン》

・この写真は、今からおよそ30年ほど昔、石垣市立文化会館でキョングン大会が行われた時の貴重なスナップです（中略）。この時、演じておられた富永実彦氏（64才）にこの写真についてお話を聞きました。（中略）

「当時は、沖縄100号というアッコン（おいも）と、台中65号というマイ（米）が大変おいしいと、人気があったわけだが、そのアッコンとマイが、ある日、どちらが、人間に貢献して、えらいかと口論を始めて、いろいろ勝手に自慢を言い合うわけだ。」

「どういう自慢をするんですか？」

「アッコンは、例えばこんなことを言う。ウミンチュ（漁師）たちは漁にでる時は、マイでなくてアッコンをもっていく。なぜかという、マイは塩や太陽の光りがあたると、くされやすくなるから。その点、アッコンは大丈夫。だからアッコンの方がえらい、どうだ、というわけだ。反対に、マイは、例えばこんなことを言う。役所勤めの人たちはマイがおいしいと言って食べているでないか。だからマイの方がえらい！とか、まーとにかく勝手に言い勝負するわけだ。」

「それから、どうなるんですか。」

「言い合いして、そのうちに、あんじー（あーそうか）、と言って、お互い認めあって、そういえば人間は自分たちがいなくなったら、餓死してしまうんだよなー、だから結局、人間よりも自分たちがえらいんだなーと言って仲直

りするわけだ。ところが、害虫がそこへやってきて、こう言う。『わだーのー
 どうあんきる？よのなかんがいつばんえらいもん、わだあー？わだあー
 ばーほいしいていかー、ばーどう、いえらい！あんじきー、よのなかんがー
 いつばんえらいやそーこのうばぬ！（あんたがた何を言ってるか？世の中で
 一番えらいのはあんた方って？あんたなんか、もし私が食いつぶしたら、私
 がえらいでないか。だから世の中で一番えらいのはこの私だ！）』と言って、
 アッコンとマイを食いつぶそうとするわけだ。」

「なるほど、そこで、人間が。」

「そうそう、そこでフマキラー（農薬のつもり）を持った人間が出てきて
 害虫を退治して、やっぱり人間が一番だ！という結論になる。」

「なるほど、おもしろいですね。これをすべて八重山方言でやるわけですね。」

「そうそう、もう即興だ。シナリオなんかない。話の筋はきめてあるけど。」

【「一枚の写真 ^{キョウギン} 狂言大会」『月刊ゆう 第34号』（1990・ミル出版）】

2、竹富町

新城島

《一番狂言》

• この狂言はキチュガン（結願）祭の奉納狂言の最初に演じられるので俗
 に「一番狂言」といわれている。

弥勒を先頭に行列するので「弥勒狂言」と呼ぶのが正しいような感じがす
 る。

内容 村の総代が田扶佐世持に命じて踊りや狂言を仕込み、結願祭に奉納祈
 願をしているところに大極たいごくの弥勒が現れ皆が欲しがっていた五穀の種子を授
 かり、喜び勇んで弥勒をおともして帰るといふ物語で演じられる。

【西大舩高壺・登野原武『新城上地島の古謡と祭祀』（2000・私家版）】

《鬼の狂言》

・島の「鬼の狂言」は結願祭の奉納劇の最後に演じられる。琉球の侍の言葉で演じられる、竹富島の鬼の狂言と内容は殆んど同じであるが舞台装置や鬼の数等が異なる。福根親雲上が王の命を受けて部下の外間里主、本村里主と連れだって沖縄本島北部の山中に住む人間を喰う鬼を退治する狂言である。

福根親雲上は二人の部下にこれから人攫い鬼を退治に行くんだが覚悟はどうかと武術の程を聞いたり、手並みを確認する。

男子の兄弟やちめ一と亀十、二人がくんじゃん村に親が健在だと聞いて訪ねて行く、それは遠く鬼が住んでいる本部山を越えなければならない長い道のりであった。歩いている途中、弟が疲れたので一休みしようと云う。しかし、兄はもう一意気だから頑張れば、母親にも会えるから元気を出しなさいと励ますが披露困憊した弟はうつぶせになって道端で寝てしまう。兄（やちめ一）はそれは致し方ない残念だといって、弟の背に手を置いて自分も休んだ。そこに鬼が現れて兄さんを攫って行った。驚いた弟は、兄を探して泣きさまよったが兄の姿はどこにも見当たらない。仕方なく弟は元の場所にそのままねてしまった。

そこへ泣きさまよっていた声を聞いてやって来たのが福根親雲上と二人の里主だった。親雲上はねている弟亀十を抱きかかえ、確かにこの辺に鬼の館がある筈だ。今、探し出せと二人の里主に命ずる。

里主二人は煙の立っている所を見つけ、それが鬼の住んでいる館に違いないと確認を急ぐ。それを確認すると、鬼を呼び出し、格闘の末、鬼を生け捕りにし、攫われた兄を倉庫から探し出して、兄弟二人無事に助けられ喜び勇んで王府へ帰る物語りである。

【西大舛高壺・登野原武『新城上地島の古謡と祭祀』(2000・私家版)】

《くいぬうべ狂言》

・「くいぬうべ」狂言は、越城村のうべという老爺が結願に招かれ、いかべという老姥と娘をともない祭りの御嶽へ行く。老爺がご馳走を神に捧げ、作物の豊穰と家族の健康など神の御加護に感謝する。村人の踊りの後、娘も

踊りを披露する。この時、着物を直そうとして老翁や老姥が娘の裾を広げ今日のために買った新しい下着を見せたりする。腰の曲がった老姥がよろけながら花風を舞うが倒れてしまう。老翁が下原節で舞い、のちに「まゆ（猫）」の手という空手風な踊りをする。最後はよろけて転びながら、老姥の乳房をわしづかみにしながら、このようにして「いかべ」を嫁にしたと自慢する。祭りも終り、太陽も沈み始めたため三人は帰途につく。

老翁や老姥が登場し、村びとや子供が舞いを披露するのは長者の大主系統のものであろう。老翁と老姥のしぐさが笑いを誘うがその重点は、やはり神への感謝と豊作予祝祈願である。娘の裾を広げて見せるのは村人に丈夫な体を披露する事であり、老翁が老姥の乳房をわし掴みするしぐさは男女の性交であらう。これは作物の穂孕みを暗示してはいまいか。

・新城島の「くいぬうべ狂言」のように祭祀とは別に狂言大会を開催して保存継承を図る試みもある。

【大田静男「琉狂言—琉球芸能の新視点—」『文学』季刊 第9巻 第3（1998・岩波書店）】

・越くいとは新城島上地港に入る右手の突出した岩場に越城村があった。その名称を省略して越くいといったのではないかと思われる。

また、越くいぬばな頂という物見台がある。それは越城村の後楯になっていて越ぬ頂という名がついたのではないかと考えられる。（中略）

うべとは新城上地の言葉でお爺さんをいう。

越ぬうべは当時の火番盛（現物見台）の番人をつとめ、そこに住みつき、上地村で毎年行われる祭祀、結願祭には長老として招待され、妻のイカベ、娘（ピセ）を連れ立って、結願祭に参加した。それが恒例になって越ぬうべとして尊敬されるようになった。しかし越ぬうべ一家は見物だけでは神々や村の役人に対しても申し訳が立たないので、娘（ピセ）、妻（イカベ）、そして、うべ自身までが各自の十八番を奉納して、無病息災を祈願し、満足して小踊りしながら帰るユーモラスな物語りである。

この狂言は、何時の時代から奉納劇として神前に奉納されたかは確かでない。

竹富町、無形民俗文化財（芸能）として昭和五十年十一月二十六日、竹富町から指定されている。

【西大舩高壺・登野原武『新城上地島の古謡と祭祀』〈2000・私家版〉】

《二番狂言》

- 三味線のつるというのに、鶴亀のつるかと思ってその模型を買ってくる

【本田安次『沖縄の祭と芸能』〈1991・第一書房〉】

• 「村の結願祭の準備はすべて整ったが、琴の糸が不足しているので、ペーチンがサンダーに、鶴亀印の絃を買って来るように言いつけますが、サンダーはおもちゃの鶴と亀を買って来たので、ペーチンは怒るが、使い道は別にあることに気づき、共に鶴亀の舞を踊る」という内容になっています。五人で演じられます。

【高嶺方祐「島々の芸能—狂言と舞踊—」『八重山毎日新聞』1997. 9. 6】

- この狂言は役人の指導によって演じられたものと思われる。

結願祭の準備に大わらわだった主人（福仲親雲上）と下男（サンダー）との物語りである。

親雲上は結願祭の準備は何一つ不足なく整ったが、唯一つ琴の絃一つだけが不足しているので、那覇の町から買わしめるためサンダーに鶴亀マークのついたものから買ってくるように特命した。ところがサンダーは主人のいいつけを錯覚したのか、商人に騙されて動物の鶴と亀の玩具を買わされて帰って来た。

ところが主人のいい分は琴の絃は鶴と亀のマークのついた絃を買ってくるようにとの特命だったのに、鶴と亀の玩具を買ってくるとはなんたることか。金の無駄づかいも甚だしい、奉納もできないのではと怒鳴りつけた。ところがサンダーは主人に買って来た理由を報告するとともに、その玩具も只ものでなく結願祭の奉納舞踊に役立つよう仕込ませてあるとあって、その舞を踊らせる。ペーチンは余りの面白さに気をとられ自分も夢中になって一緒に踊りまくるペーチンであったため、サンダーは一大災難を逃れることができた

という傑作である。

【西大舛高壱・登野原武『新城上地島の古謡と祭祀』(2000・私家版)】

西表島網取村

《池の水替え狂言》

・家を新築し、庭を造らせた主ぬ前（家の主人）は、池の水が汚いことに気づき、サンダー（下男）に、池の水を替えるように言い付ける。しぶしぶ池の水替えに出たサンダーだが、あまりの寒さに酒を飲んで体を暖めることにした。しかし歯止めがきかなくなり、ついには酒を買うためにターグ（水替えに使う道具）まで売ってしまう。

そこでサンダーは、主ぬ前への言い訳として、川で鬼に会い必死で逃げてきたと嘘をつくことにした。その話を聞いた主ぬ前が、川に見に行くと鬼が現れる。主ぬ前は、鬼に食べられそうになったため、どんなことでもするから命だけは助けてくれと、土下座して頼む。鬼は、サンダーに毎日、酒と肴を御馳走するという条件として姿を消す。

家に帰った主ぬ前は、鬼がサンダーのことだけを話したことが気にかかり、鬼の正体を確めるためにもう一度川に行ってみる。鬼は再び現れるが、主ぬ前は鬼に「お前はサンダーではないか」と問い詰める。鬼が戸惑ったのを見て、主ぬ前は鬼を捕らえようとする。そうして揉み合った末、主ぬ前はついに鬼の面を剥ぎ取り、鬼の正体を暴く。

・この狂言は別名「網取狂言」とも呼ばれ、今では廃村となった西表島の網取村の芸能である。被取材者によると、戦前は節祭り中で演じられていたらしいが、戦後は数年前に一度演じられたただけだという。

台詞は首里方言が用いられており、いわゆる「琉狂言」に属する。見どころはサンダーが鬼に扮するところにあるが、このように一人二役を演じるのは八重山の狂言では珍しい。

【山里純一編『琉球大学八重山芸能研究会創立三十周年記念誌 八重芸』(1997・琉球大学八重山芸能研究会)】

西表島古見村

《鍛冶工》^{カザク}

• 農作業を割り当てられた伊武戸が、農具が少ないことに気付き、鍛冶工に農具を作ってもらようようお願いをする。鍛冶工は加那と祖良を呼び出す。はじめに鍛冶場を清め、鍛冶の神に祈願をして、お供えした酒を頂戴してから農具作りの作業に取り掛かる。音楽に合わせて鉄鎚を打ち、鋏で農具を挟んで掲げて、その仕上がり具合を確認する。途中、鍛冶工が打ち上げたばかりの農具を伊武戸に渡し、伊武戸が火傷をして鍛冶工の耳をつかまえたり、打ち上げた農具を絶賛して、加那が「この道具ならば2、3日かかる仕事も1日で片付けることができる」といったせりふを受けて、祖良も農具を誉めるつもりが「この道具ならば1日で片付ける仕事も2、3日かかるよ」と言って鍛冶工に叱られるといったおかし味（笑い）もある。そして、無事に鍛冶を終えて帰るといった内容である。

新しい農具をつくるということは、農業にさらに勤しむということであり、豊作を予祝を意味することになる。ゆえに儀礼的な「例の狂言」といわれる。なお、鍛冶狂言は、竹富島や小浜島でも演じられている。

【大城學「古見の結願祭」『沖縄芸術の科学 第10号』〈1998・沖縄県立芸術大学附属研究所〉】

• 農作物の豊穰を予祝する狂言である。しかし、直接そのことをいうのではなく、農作業のため道具を立派に拵えることで、間接的にその意を表すのである。

この狂言のなかでは、石垣島にヤマトから直接鉄の移入されたことが謡いほのめかされている。前打2人が鍛冶工の持つ、農機具作成用の焼けた鉄を打ちながら謡う歌謡がそれで、石垣島大浜村のヒルマクイ、幸地玉ガネの2兄弟が薩州坊の津から、農機具を買い入れたという、『八重山島由来記』に所収された崎原御嶽の由来のことを、暗にほのめかしているともとれる謡で、側面的に八重山地方への鉄器移入を検証していく上でも重要な示唆となりう

る狂言だと思料する。

この狂言は古見の結願祭で演じられる外、竹富島の種子取り祭や、小浜島の結願祭でも〈例の狂言〉として、それぞれの方言で演じられているものである。

【森田孫榮「古見の伝統民俗芸能」『沖縄芸術の科学第10号』〈1998・沖縄県立芸術大学附属研究所〉】

・農作物の豊穰を予祝する狂言である。しかし、直接そのことを言うのではなく、農作業のための道具が如何に立派に作られたかを言うことで、それをなすのである。

カザクは竹富島の種子取り祭で演じられるのが有名であるが、古見と小浜島でも結願祭の「例の狂言」として演じられている。竹富、古見、小浜の「カザク」は、内容的には同一である。しかし、古見と竹富のものを比較してみると、劇中、鍛冶工が述べる「カザリグチィ」（飾り口。鍛冶神への祈願の言葉）が竹富のものに比べると短くなっている点、後述の滑稽を狙った加那と祖良のやりとりが竹富のものには見られない点、竹富のものが歌を劇中でうたうのに対し、古見のものにはそれが無い点など、いくつかの異同も見られる。古見の「カザク」は古見の方言で演じられる「島狂言」である。（中略）この狂言は「例の狂言」であるが、滑稽味を前面に押し出したものとなっている。そのなかでも、鍛冶工が打ち上げたばかりの鍬を伊武戸の手に渡し、伊武戸が火傷をして鍛冶屋の両の耳をつかまえる部分と、見事に打ち上がった道具を讃えて、加那が「この道具であれば、二、三日もかかる仕事でも一日で終える」と言ったのを受けて、同様に道具を讃えようとした祖良が「この道具であれば、一日で終わる仕事も二、三日掛かる」と逆に言い違えて、鍛冶工に叱られるところが、この狂言の笑いのポイントとなっている。

【波照間永吉「西表島古見の結願祭と狂言」『南島祭祀歌謡の研究』〈1999・砂子屋書房〉】

カミクミ
《亀組》

・頭大主が手事で登場し、今日の吉日に釣りをするという。釣り糸を上手側に投げる。すぐに当たりがあり、頭大主が亀ではないかと言って糸を手繰

ると、何と、五穀の種子の入った籠を持った女神ではないか。この島の者ではない、如何なる者であるか問うと、女神はニライ・カナイからやってきた豊穰の神であると答える。女神は頭大主に五穀の種子の入った籠を渡し、稲の栽培法を教え、生産に励んで国王への貢納を立派に果たすようにと諭す。頭大主は正面に向かって両手で五穀の入った籠をうやうやしく捧げ、この果報を村人に知らせようと喜びの気持ちを述べる。「伊計離節」の演唱にのせて女神と頭大主は下手に退く、という内容である。

祭祀儀礼のなかで神の世界と意識されているニライ・カナイから、女神が五穀の種子を携えて人間の世界にやって来る。そして村人の代表である頭大主に五穀の種子を授けるといふ豊穰予祝の〈例の狂言〉である。

【大城學「古見の結願祭」『沖縄芸術の科学第10号』〈1998・沖縄県立芸術大学附属研究所〉】

- 筋立ては、頭大主がうららかな好天にさそわれ、魚釣りに浜へ出て、釣糸を垂れていると、当りがあるので、大魚がかかったと思い竿を上げてみると、それは魚ではなく亀であった。すると亀はただちに女の姿に変身、自分はこの世のものではなく、海底の他界（ニライ）の神だと唱え、そして女神は、人間の世界に豊穰をもたらすためにやってきたと告げる。頭大主は驚愕して、女神の捧げ持つ五穀の種子籠を授り、よろこびいさみ村へ帰る。

【森田孫榮「古見の伝統民俗芸能」『沖縄芸術の科学第10号』〈1998・沖縄県立芸術大学附属研究所〉】

- 亀や儒艮が神の使者として知られているが、亀組狂言は亀が女神に変身し寿福を与えるのである。「亀組」のあらすじを見ていると、八重山古謡にある「みなとゆんた」のように「大目の網や細めの網でイワシやトウゴロウイワシを巻いたら魚はとれず、遊び仲間の美童や愛しい女性が巻かれてきた」という筋の否定的展開を想起させる。しかし、「亀組」が笑いにならず厳粛なのは、亀を神の使者という人々の認識であり、五穀の授受という予祝のためであろう。

【大田静男「琉狂言—琉球芸能の新視点—」『文学』季刊 第9巻 第3号 〈1998・岩

波書店】

・「亀組」は全体が組踊の影響の下に成り立っており、これが古見地生えのものではないことを推測させるが、これが何処から入り、何時頃から上演されたかは不明である。周辺の村に類似の芸能はなく、貴重である。さらにこの狂言は、内容的にも、沖縄の伝統的かつ固有の観念であるニライ・カナイの豊穡他界観をみごとに表現しており、この点でも注目される。(中略)

狂言の内容は、頭大主がうらかな好天に誘われ、魚釣りに浜に出て釣り糸を垂れる。すると当たりがあって、大きな魚がかかったと思い竿を上げてみると、それは魚ではなく亀であった。釣り上げられた亀は女に変化し、自分はこの世のものではなく、海底の他界（ニライ）の神である、と述べる。そして女神は、人間の世界に豊穡をもたらすためにやって来たと言う。頭大主は喜んで女神に向かい合い、女神が捧げ持つ五穀の種子の入った籠を戴いて、村へ帰る、というものである。

【波照間永吉「西表島古見の結願祭と狂言」『南島祭祀歌謡の研究』(1999・砂子屋書房)】

ターカイン
《田耕し》

・西表島の古見部落で結願祭の鍛冶工狂言の後に演じられる「例狂言」のひとつであるが、結願祭の行なわれなくなった現在では演じられていない。

かつて古見部落には「モヤイダー」と呼ばれる水田があり、この水田の収穫を部落古来の年中行事の諸費用にあてていたという。狂言はこの「モヤイダー」での一つのできごととして演じられ、勤労は福を招くという教訓的意味を持つという。

・「モヤイダー」の耕起時期になると、古見の総代（今でいう公民館長）が、カナーとサンドウ、イントウーの三人の若者を呼び、「今年も田を耕す時期になったので、田を耕してきなさい。」と命令する。三名衣服を替えて、田にやって来る。

サンドウーは田の水抜きのために溝口を開け、イントウーは持って来た弁当を木の枝につり下げる。「さあ、むこうまで、耕し競走をしよう。」というカナーに続いて二人は「もう休もう」と言ってしまう。いくらなだめすかし

でもいっこうに働く様子がないので、カナーは一人で働き始める。

そのうち、カナーの鍬が石に当たって欠けてしまう。「一人では持てないほど大きな石があるから、三人で取り除こう。」と言っても、「そんなものはおまえの仕事だ。自分でやれ。」と言って相手にしない。しかたなくカナー一人で掘り出しにかかる。

やっとのことで石を掘り出したカナーは、その石を洗って陽にかざしてみる。よくよく見ると、石だと思っていたものは黄金であった。喜んだカナーは思わず、「石だと思ったら、なんと、黄金ではないか。」と叫んだ。これを聞いたサンドゥーとイントゥーは、「それならこれは三人のものだ。」と言って立ち上がる。カナーは「そんな馬鹿な。」と怒り出すが、二人も引きさがらない。結局、総代に相談しようということになる。

総代の前でも、三人は、自分のものだと言ってゆずらないので、総代は「一番年長者に黄金をあげることにしたらどうだ。」と提案する。三人は納得して、イントゥーから自分の歳を説明しだす。

イントゥーは「私の歳は、この島がまだ茶碗ぐらいの大きさの頃に生まれました。」と言い、サンドゥーは「この島の天と地とがまだ別れない頃に生まれました。」と言葉巧みに主張する。しかし、最後のカナーは「私の長男はこの二人と同じ歳です。」と言う。この言葉に二人とも何も言えなくなり、とうとう働きもののカナーが黄金を手に入れるのである。

【創立二十周年記念誌編集委員会『琉球大学八重山芸能研究会創立二十周年記念 八重山芸能と私たち』(1986・琉球大学八重山芸能研究会創立二十周年記念誌編集委員会)】

• 古見村の総代が、使用人3人を呼んで自分の田圃を荒打ちさせることにした。はじめのうち3人とも真面目に仕事をしていたが、そのうち津久利と松の2人が怠けてしまう。懸命に働いていた蒲太が金塊を掘り当てた。他の津久利と松は自分たちにも分け前があると言い、総代に決着をつけてもらおうということになった。総代は、3人のなかで年長者に金塊をやるという。松は、自分はこの島が茶碗一つにも満たないときから生まれていると答えた。津久利は、私はこの島の天と地がまだ分かれていないときから生まれている

と答えた。金塊を掘り当てた蒲太は、自分の嫡子はこの二人の者と同じ歳だと答える。総代は、蒲太が年長者だといって金塊を蒲太に渡す。得意顔の蒲太。松と津久利は互いに罵りながら退場する、という内容である。

真面目に働くと果報がつくという教訓的な意味あいの狂言だが、おかし味があり、笑いを誘う。

【大城學「古見の結願祭」『沖縄芸術の科学第10号』〈1998・沖縄県立芸術大学附属研究所）】

- 狂言の筋は、村の総代が使いの者3人へ、自分の田の荒打ちを云いつける。初めは真面目に働いていたが、そのうちに2人の者は、いろいろ口実をもうけて怠け、昼寝を決め込んでしまう。それでも真面目に働いていた1人が、田の中から金塊を掘り当てる。怠け者の2人が自分たちにも分け前があると、主張したため、3人は総代に決着をつけてもらうよう申し出る。事情を聞いた総代は、3人のうちで一番歳かさのものを、金塊の所有者にするという。よってそれぞれ自分が歳かさであることを主張する。マツァーは、自分はこの村が茶碗一つにも満たない時から生まれている者だという。ツクリャーは、自分こそこの島の天と地とがまだ分かれないう時から生まれているのだという。最後に返答することになった、真面目なカマダーは、自分の嫡子はこの2人の者と同じ歳だと答える。それで総代はカマダーが最年長だとして、金塊をカマダーに渡す。怠け者の2人は幸運を逃した腹いせに、互いに罵りながら下がってゆく。

【森田孫榮「古見の伝統民俗芸能」『沖縄芸術の科学第10号』〈1998・沖縄県立芸術大学附属研究所）】

- 「田耕し」狂言は怠け者を戒める狂言である。

村の総代が、田を整地する季節がやってきたので、村の若者三人に田の整地を命じた。若者たちは田に向かい木鍬で田を耕したが二人は怠け、煙草を吹いたり、飯をたべて働こうとしない。その内、まじめに田を耕していた若者が金を掘り当てる。ところがそれを聞いた二人はこれは三人のものだと言い張る。真面目な若者が怒っても二人はひきさがらない。それでは総代に相

談しようということになった。総代は言い争ってもしようがないので年上のものとしようではないかと提案する。

怠け者の一人は「私の歳は、この島がまだ茶碗ぐらいの頃に生まれました」と言い、もう一人は「この島の天と地がまだ分かれないうまれました」と主張した。しかし、働き者の若者は「私の長男はこの二人と同じ歳です」と言う。これにはさすがの怠け者たちも返す言葉がなく金塊は真面目な若者の物となる。

【大田静男「琉狂言—琉球芸能の新視点—」『文学』季刊 第9巻 第3号 (1998・岩波書店)】

・狂言の内容は、村の総代が使いの者三人を呼んで自分の田の荒打ちをさせる。初めは真面目に働いていたが、そのうちに二人の者はなんのかんのといて怠け、昼寝を決め込んでしまう。そのうち、真面目に働いていた一人が田の中から金塊を掘り当てる。怠け者の二人が自分たちにも分け前があるものと主張したため、三人は総代に決着を着けてもらうように申し出る。事情を聞いた総代は、三人のうちで一番年嵩の者をこの金塊の所有者とすると言う。それぞれ自分が年嵩であることを言うために、マツァーは、「自分はこの村が茶碗一つにも満たない時から生まれている者だ」と言う。これに対しツクリャーは、「自分はこの島の天と地とがまだ分かれないうまれているのだ」と言う。最後に返答することになった、真面目に働いていたカマダーは、「自分の嫡子はこの二人の者と同じ年だ」と答える。それで総代はカマダーが最年長だとして、金塊をカマダーに渡す。怠け者の二人は幸運を逃した腹いせに、互いに罵りながら下がっていく、というものである。

【波照間永吉「西表島古見の結願祭と狂言」『南島祭祀歌謡の研究』(1999・砂子屋書房)】

《長者》

・翁と媪の長者夫婦が子孫数十人を引き連れて登場する。翁は黒地の着物を着てミンサー帯を締め、頭に黒色を被り、白眉、白髭を付ける。右手に扇子を広げて持ち、左手で杖をつく。黒足袋。媪は薄桃色地の紅型を羽織（帯なし）、白足袋。右手にクバ団扇を持ち、左手で紅型の前衿をとる。

翁、媪、踊り手の順に下手から登場し、左廻りに舞台を一巡する。踊り手は下手先から下手奥、下手奥から上手奥、上手奥から上手先に立つ。翁が舞台中央先に立ち（媪は翁の後方に立つ）、前屈みの姿勢で、首里方言で祝言を述べる。

祝言の内容は、長者夫婦が百二十歳になるが健康であること、また、豊作であることを神に感謝し、この喜びの御礼に子孫に歌舞を演じさせてご覧にいらしましょうというものである。祝言を述べると長者夫婦は下手先に移る。翁は椅子に腰掛け、媪は翁の側に座る。以下、子孫たちによって芸能が演じられる。

【大城學「古見の結願祭」『沖縄芸術の科学第10号』（1998・沖縄県立芸術大学附属研究所）】

・下手から登場した長者とその子孫一同は、舞台を一巡し、長者は神前に向かい寿詞を唱えてから、長者と媪は下手手前で、椅子に腰掛ける。子孫は幕の前に横並びに着座する。長者が一同の者に芸能を演じ、奉納いたすよう下知すると、〈かじゃでい風〉を序に、続いて数番の踊りが演じられる。長者は踊りのたびに「ユーシャン クワンマグヌチャー」（でかした、子や孫たちよ）と賞賛の辞をかける。

この〈長者・ンミ〉で演じられる舞踊は、次のとおりである。

御前風・ナチジン（今帰仁）・ミンヨーミン（耳よ耳）・テンヨー・馬節・イシャドーネ・マンガニスツツア・シヨンカネー・一番狂言・二番狂言・バーチ（おばさん）。

これが終了すると、長者夫婦と子孫一同は舞台を一巡して下手から下る（長者の台詞、〈御前風〉は省略する）。

〈ナチジン〉（歌詞は省略）

稚児の踊りで、数名の幼童が演じる。扮装は、頭部に赤や紫の長巾でヤラビカビ（童被り）になし、白地緋の着付け白足袋ばきの装いである。右手に扇子、左手に手巾を採り持ち踊る。

〈ミンヨーミン〉（歌詞は省略）

これも稚児の踊りで、ふたりの幼童が演じる。扮装は、頭部に赤い長巾で

ヤラビカビ（童被り）をなし、赤地に白い花模様の着付け、白足袋ばきの装いである。採りものはなく、素手にて手振り、囃子にのって、曲げた左ひじの下方へ右手の掌を当てる、独特な所作で演じる。

〈テンヨー〉（歌詞は省略）

これも稚児の踊りで、ふたり立ちの幼童が演じる。扮装は、頭部に白鉢巻を締め、赤地に白い花模様の着付け、白足袋ばきの装いである。右手に白麿を採り、それを打振る所作をなす。

〈馬節〉（歌詞は省略）

これも稚児の踊りで、ふたり立ちの幼童が演じる。扮装は、頭部に白鉢巻を締め、白衣と白袴下着付の胸部に、黒地菊花模様のスジカキを羽織り、白黒縦縞の脚絆を付け、白足袋装いをなし、胸部に馬頭づくりものを結いつけ、それに取り付けられた手綱に準らえた緋色の長巾を、左右の手でとり、馬を御すさまを所作して踊る。

〈イシャドーネ〉（歌詞は省略）

二人踊りで、ふたり立ちの二才が演ずる。扮装は、頭部に白鉢巻を締め、黒紋付きタナシを着し、角帯を結び、腰に水色の長巾で扱結びになし、白足袋をはき、白黒縦縞の脚絆を着け、手笠を右手に採り持ち踊る。

〈マンガニスツツァ〉

女踊りで、乙女のひとり立ちで演じられる。扮装は、頭部に白鉢巻を前結びになし、着付けは、緋地白緋のスティブター（広袖衣）を纏い、ミンサー帯を締め、白足袋ばきの装いで、両手に四ツ竹を執り、打鳴らしながら踊る。

〈シオンカネーマ〉（歌詞は省略）

二才踊で、二才がひとり立ちで演じる。扮装は、頭部に紅色の鉢巻を前結びになし、水色のタナシを着し、角帯を締め、白足袋ばきの装い。左右の手に金色の扇子を採り構える。

〈一番狂言〉（詞章は省略）

二才踊りの形態をとり〈ツクドゥン〉のひとり立ちで演じる狂言である。

〈古見口説〉中の冒頭の歌曲が地謡に当てられ、長い囃子を唱えつつ所作がなされる。扮装は、頭部に白鉢巻を前結びにし、紺地のスティブターを着流しになし、角帯を締め、黒足袋ばきの装いでなされる。

＜二番狂言＞（詞章は省略）

二才踊りの形態をとり＜ペーチン＞のひとり立ちで演じる狂言である。＜古見口説＞中の2節目の歌曲が地謡に当てられ、長い囃子を唱えつつ所作がなされる。扮装は、頭部に白鉢巻きを前結びにし、紺地のスディブターを着流しになし、角帯を締め、黒足袋ばきの装いでなされる。

＜バーチ＞（歌詞は省略）

この踊りは、バーラシキョンギン（笑わせ狂言）の形態で、女のふたり立ちで演じる。扮装は、頭部に赤い長巾を被り、後結びになし、藍色のスディブターを着流しになした者と、片や長い長巾を頭に被り後結びとし、黄色のスディブターを着流しに装った両名によって、足袋ははかず素足でなされる。

以上が＜長者・ンミ＞にかかわる芸能である。

【森田孫榮「古見の伝統民俗芸能」『沖縄芸術の科学第10号』（1998・沖縄県立芸術大学附属研究所）】

・「長者」は沖縄各地の村芝居で行われる「長者の大主」系統の芸能である。長寿と富貴万福の長者夫婦が、我身の幸福を村の神に感謝して、一緒に登場した子孫による様々な芸能を奉納するものである。

長者の扮装は黒朝衣にミンサーの帯を締め、頭は黒い布の被り物で覆う。眉は白糸の作り物を付け、頬および鼻下そして顎から長い白鬚（前屈みになると帯のあたりまで垂れる）を付ける。黒足袋を履く。右手には金色の扇子を広げ持ち、左手には杖をついて、前屈みの状態で所作を行う。媼は、小さな文様を染めた紅型衣装を打ち掛けに着け、白足袋を履く。頭には老婆風に、マーニ（クロットグ）のシュロ毛の繊維で作ったかつらを着ける。子孫達は自分の演ずる芸能の扮装のまま登場する。下手から登場した長者とその子孫一同は舞台を一巡し、長者夫婦は下手手前で椅子に腰掛ける。子孫は背の幕の前に横一列に並んで着座する。先ず長者が一同の者に芸能を演じ、奉納するよう指図すると、最初に「御前風」が踊られる。子孫の芸能の披露に対し、長者は「ユーシャン クワンマグウヌチャー」（でかした、子や孫たちよ）と賞賛の声をかける。そしてまた、子孫の者に芸能を披露するように命じる

と、年下の子孫から舞台に出て踊る。このパターンで長者の子孫全員の芸能が展開されるのである。

【波照間永吉「西表島古見の結願祭と狂言」『南島祭祀歌謡の研究』(1999・砂子屋書房)】

ムトウバラ
《本原狂言》

- 由布島の向かいにある水田は、「ユナラダ」と呼ばれ、竹富島や黒島の人々は舟で通って耕作していたがそこで一つの出来事として演じられている。
- 西表島古見に住む、本原フレナヤーという男が、ユナラダにシーラ（稲叢）を見に行ったが、三日たっても帰ってこない。本妻のフレブナーは、以前から黒島の女、ヤナスーと夫との噂を聞いていた。そこで手造りの酒をもって夫の様子を見に行く。

夫は、本妻が来たのに驚きヤナスーを隠すが、妻が酒を飲ませながら「仲良くするからひとめ会わせて下さい。」と言うので遂いに二人を会わせることにする。話をするうちに妻は、自分が汗水ながして作った米を、ヤナスーに与えていたことに腹をたて、彼女になぐりかかろうとする。それを見た夫は、妻を突き倒しヤナスーとその場を去ってしまう。ひとり残された妻は「帆の高い女は船体を支えきれないように、気位の高い女は夫とうまくやれないと聞いてはいたが、今日は自分の身に起こってしまった。」といいながら去っていく。

【創立二十周年記念誌編集委員会『琉球大学八重山芸能研究会創立二十周年記念 八重山芸能と私たち』(1986・琉球大学八重山芸能研究会創立二十周年記念誌編集委員会)】

西表島祖納村

《品取り狂言》

- この狂言は西表祖納における笑し狂言の一つで、主として還暦以上の生年祝いの座で演じられた。現在はお正月やその他の祝宴の席でも余興として演じられている。
- 親の還暦を迎えたイシトゥーは、村の青年たちを呼びあつめて祝宴の座

に供される料理に使う材料をとってくるように言い付ける。イシトゥ自身は猟犬を連れて仲良底へ猪を捕りに、アッチャマとマチューは美多良の海に行きミズヌヤパダラを捕りに、またカニムイとチルンガニは大湊にキゾーを捕りに出かけ収穫を得て帰る。そして捕ってきた獲物をみせあって祝宴の準備にとりかかる。

それぞれの獲物を捕る場面をユーモラスに表現したところに醍醐味がある。

【創立二十周年記念誌編集委員会『琉球大学八重山芸能研究会創立二十周年記念 八重山芸能と私たち』(1986・琉球大学八重山芸能研究会創立二十周年記念誌編集委員会)】

・親の生年祝儀を盛大に行う準備として饗応料理の素材を取り揃えるため、兄役が若者たちを呼び寄せ、それぞれの品を調達させます。若者が、分担された品を山や海から採って来るさまを六人が軽快に演じます。

【高嶺方祐「島々の芸能—狂言と舞踊—」『八重山毎日新聞』1997.9.6】

西表島祖納村・干立村

イユチ キチョングン 《魚突き 狂言》

・村で新しい貫屋が建つとアラヤヌヨイの晩に、まだ祝い酒が酌み交わされない時に、空の籠に棒を通して若者二人で担ぎ、家の周囲を廻る。「ヒョー アラプシ」と前者が言えば「ヒョー アラネーヌ」と後者が言い返し、庭に散らかっている木切れや石などを拾って籠に入れて廻る。ヒョーは合図の言葉、アラは粗いくずを意味し、プシは拾うという意味で、「アラネーヌ」とは、くずが拾われなくなったことをいうのである。一見些細な儀式だが、これが終らないうちは、家の完成を祝うヤータカビの儀式に入ることができない。

(編注。石垣島白保集落でも、これと同じ習俗がある。ただし、白保では「アリプサエー、アリブラヌ」(蟻を拾いなさい蟻一匹もない)と唱えるという《喜舎場永珣、1970『八重山古謡』下 沖縄タイムス社刊、385頁》)。干立や祖納では、木片をマカブという魚に見立てて大工の棟梁が鋸で突いた。こうして捕った魚が本日の祝の料

理になったと報告するのであるが、これをイユチキキョンギン(魚突き狂言)と称している。網取の例もキョンギンであろう。

【山田武男〈安溪遊地・安溪貴子編〉『わが故郷アントゥリ—西表・網取村の民俗と古謡—』(1986・ひるぎ社)】

黒島東筋村

スパン 《初番》

・黒島東筋の初番は(中略)筑登之が登場し寿詞を述べ、のちに田夫佐や仲主を供に従えて御嶽へ行き神に豊穰を謝し、来る年の弥勒世界報を願うという内容である。(台詞は省略)。寿詞は「村の世持という役職の村福筑登之が、願ったことも叶い、作物も満作し、王府への税も完納して、又、残りが家の蔵々に積み上げ、村中のひとびと始め役人に至るまでこのうえない喜びである。御嶽の結願を今日の吉日に願解きをしよう。村の田補佐役の阿主や仲主を従えて御嶽に行き、神に今年の願解きをし来年の弥勒世界報をお願いしましょう」と述べている。

世持ちは村の百姓から選出され、役人の相談を受け村人に伝達する役。田夫佐は世持の補佐役。仲主は祭りの係りの一つ。

寿詞のあと、田夫佐の口説ばやしが踊られ仲主の作原口説などがあり、次に長者が寿詞を述べる。(台詞は省略)。長者が言うには「筑登之の良い心の故に今日の神願いが通じ弥勒加那志が現れ、粟や稲の種子を賜った。稲の種子は夏の水に漬け、冬水に播種しなさい。弥勒加那志から授かった五穀であり大切にしなさい」。筑登之は「今日の吉日に弥勒加那志を拝み、五穀の種子を授かった弥勒加那志をお供して帰ろう」と述べる。

【大田静男「琉狂言—琉球芸能の新視点—」『文学』季刊 第9巻 第3号(1998・岩波書店)】

黒島仲本村

スバン
《初番》

・「スバン」と唱える。結願祭における奉納芸能で最初の演目で初番とも言われている。

各村々によって多少の違いがあるもののそれぞれの特徴がある。沖縄本島地域に伝わる長者の大主の系統であり多くの子供たちを引き連れて神への数数の踊りを奉納させ、今年の豊年を感謝すると共に来夏世の更なる豊穰と住民の健康を予め祈願する芸能である。

今回は仲本村の初番で出羽に柳の音曲を配して重厚さを呈している。

【『石垣在黑島郷友会創立40周年記念 黒島の伝統芸能祭』〔パンフレット〕〈1995〉】

小浜島北村

イチバンキョウギン
《一番狂言》

・この狂言は村の総代とターバサと呼ぶ村の理事役の四人が出演し、神の鎮座する聖なる御嶽で先に述べた総代の台詞を唱える。すると神様が現れ、粟、稲、芋などの作物の数々の種子を総代に授けるというストーリーになっております。ターバサとは「田ぶさ」の事だと思いますが総代や田ぶさはいずれも村人（百姓）を代表する役人で、その人たちの台詞は、即、島の人々の台詞であり、願いであり、はたまた、村人の実践目標であったと考えられます。豊作の世であればこそ、年貢も即刻完納でき、役人様も持て成しができると台詞は語ります。だから村人はみな心を一にして豊作の世を迎えるため一生懸命働こうと指導督励を受けていることがわかります。

【石垣久雄『『八重山嶋農務帳』にみる人頭税時代の農民統制―祭事芸能を中心として―』『石垣市史のひろば 第10号』〈1986・石垣市〉】

《鍛冶工狂言》

・小浜島で“例の狂言”として演じられている「鍛冶工狂言」は、旧暦八、九月「つちの亥」の日から始まる結願祭の際、嘉保根御嶽の境内に設けられた舞台上で奉納芸能の一つとして演じられている。

この狂言は実は竹富島からもたらされたもので、小浜島の西盛家の祖先が

竹富島の本仲家の祖先から伝承して小浜島に伝えたものとされている。したがって両島の「鍛冶工狂言」は同系統のものであり、島の狂言は竹富島のものよりずっと簡略化されている。

しかし狂言の流れや構成そのものは、竹富島と全く同じで、ただ小浜島の場合、後半に実際に牛にすきを引かせながら“うろんつキんぬじら一ん”を歌いながら耕作している結びの場面が違うだけである。

- 登場人物である鍛冶工、鞆押し、前打ちの四名による①会話と②飾り口（祝詞）と③歌謡で構成され、全体を四つの段落に分けることができる。第一段落は鍛冶工の登場による農機具を作るわけの説明と鍛冶工・鞆押し・前打ちなど登場人物の登場までの部分であり、第二段落は鍛冶工による飾り口の部分で、そこではこれから作る農機具が無事に出来上がるようにと神への祈願を行っている。

第三段落は鍛冶工・鞆押し・前打ち達の登場人物による農機具作成の過程を簡単な動作をともなっている部分で、この狂言の中心をなす部分である。そして第四段が実際に牛にすきを引かせながら耕作している結びの部分である。

この狂言はその名の示すとおり、農具を作り出す狂言である。初めに鍛冶工が登場し、名告げをした後、これから農具を作りに出かけるという口上を述べ、島の若者三人を呼び出し、実際に農具を念入りに作り出す所作を演ずる狂言である。他の“例の狂言”と違って、滑稽な場面もあるが、その主要な部分は鍛冶工主の唱える「飾り口」にあり、その呪言の力によって、立派な農具を作り出そうとする意図が明瞭にあらわれている。

“例の狂言”は農耕儀礼的な狂言であり、その中でも特に「飾り口」を唱えることを大切にしている。「飾り口」がこの狂言の中軸をなしているということは、村落共同体の島人が如何に御嶽の神を中心とする御嶽信仰に強く依拠していたのか物語るものであり、この「飾り口」が挿入されることにより、この狂言は村落共同体の思想とますます密接に結びつくのである。これはことばのもつ霊力、すなわち言霊の力に頼って無事に立派な農機具が出来上がることを請い願う島人のもつ言霊信仰のあらわれだと言えよう。

【黒島精耕「小浜島の「鍛冶工狂言」について考える」『八重山毎日新聞』1997. 8. 20】

・「鍛冶工狂言」は「二番狂言」でもあります。鍛冶工狂言は、農具を作ることは、ひとびとにとって、重要な業であったことを如実に表している狂言です。農業祭儀では欠かすことのできない例の狂言であるとともに、八重山地方に鉄器が導入された消息をうかがい知り得る重要な芸能でもあります。

竹富島や古見村の「鍛冶工狂言」と比較するのも興味深いでしょう。

【高嶺方祐「島々の芸能—狂言と舞踊—」『八重山毎日新聞』1997. 9. 6】

竹富島仲筋村

《あう爺狂言（シドゥリヤニ）》

・種子取り祝で村の若者達ははしゃいで祭に出かけて行くので年寄りはいじとして家に居れない。それで年寄り同志が相集りお嶽参りをして巻踊をなし五穀豊穰を祈念するという狂言で老人四名で演ずる。唄、トンチャ。

【東田正祥「竹富島の民俗芸能」『八重山の民俗芸能（1） 沖縄県文化財調査報告書 第20集』（1979・沖縄県教育委員会）】

・仲筋部落を代表して、四名の長老が神前に豊年を祈願する狂言である。なお、「しどりや」とは白鳥のことであり、白鳥は神の使いで、豊年をもたらすという伝説から、この狂言では「しどりや踊」が踊られる。

【上勢頭亨「種子取祭に演じられる芸能」『竹富島誌 歌謡・芸能篇』（1979・法政大学出版局）】

・仲筋村の最年長の老人が登場し、「子や孫たちは、種子取のお祝いで張り切っている。種子取の賑いが聞こえると、私たち年寄りも、家で落ち着いていることはできない。これから世持御嶽に出かけて、神様にシドゥリヤ踊りを奉納し、豊作の願いをしよう」と、仲間の老人三人を誘う。

この狂言に登場するお年寄りは、仲筋村の現在の年長者の四人という設定になっており、次の順序で演じられる。

①御嶽の神様に礼拝する。②シドゥリヤニを歌い踊りながらお神酒をいただく。③お神酒の飾ん口かざぐち（祝詞）を唱える。④ササラにし風かじを歌う。⑤トンチャーマを歌って退場する。

尚、シドゥリヤニとは、「千鳥群れ」の意で、「チドゥリヤーンニ」が「シドゥリヤニ」と訛ったのである。チドゥリヤーンニ（千鳥群れ）とは、浜辺で千鳥が群れることで、「千鳥が群れるように、我々人間も寄り集まろう」という意味であり、この狂言は、村人が種子取祭に寄り集うことをすすめている。

【全国竹富島文化協会編『沖縄県竹富島の種子取祭台本集 芸能の原風景』（1998・瑞木書房）】

・竹富島のアウジ狂言（しどうりゃーに）には、四人のアウジ（老爺）が登場し、世持御嶽に向かい五穀豊穰のニガイフツ（願口）を述べる。彼等はただの老爺ではなく知識と経験を積んだ神に近い存在であろう。

【大田静男「琉狂言—琉球芸能の新視点—」『文学』季刊 第9巻 第3号（1998・岩波書店）】

・シドゥリヤニとは、「千鳥群れ」の意で、この狂言は「千鳥が浜辺で群れ集まるように、我々も種子取祭に集まろう」という内容のものである。ただし、このシドゥリヤニに登場する四人すべてが「あう爺」（お年寄り）なので、「あう爺狂言」または「御主前狂言」と呼ぶこともある。

シドゥリヤニは、種子取祭の芸能のなかでも、重要な位置を占める呪狂言じーきょんざんとして奉納される。すでに述べたように、呪狂言とは農耕に関わる儀礼的な狂言のことである。しかし仲筋村が奉納するシドゥリヤニは、農耕儀礼ではない。仲筋村の長老が種子取祭への参加を呼びかけ、世持御嶽に参拝するという芸能である。

・このシドゥリヤニに登場する老人は、仲筋村の最長老の四人という設定になっており、実在の長老の名前を名乗って年齢順に登場することになっている。しかも、現役の頃は仲筋村の公職にあった老人たちで、村人から尊敬されている老人である。したがって、シドゥリヤニで名前が出ることは名誉

なこととされている。

【狩俣恵一『南島歌謡の研究』(1999・瑞木書房)】

・「あぶじ狂言(あぶじきょんぎん)」は、八重山諸島の竹富島で毎年旧暦九月か十月の甲・申の日から十日間行われる「タニドゥル」(種子取祭)の八日目に世持御嶽の境内の舞台上で演じられる。この狂言は、別名「しどゥりゃーに」とも言う。仲筋村(集落)で継承されている狂言である。この狂言は、毎年、プログラムのはじめに演じている。

「あぶじ」「御主前」ともに老人、翁の意である。本御主前(むとううしゅまい)の「本」は、長老の中でも村長(むらおさ)的な人物を意味する。本御主前とあぶじ三人が登場する。村の長老四人が種子取祭に、世持御嶽に参詣してシドゥリャ踊りや巻踊りをして、豊作の祈願をしようという内容である。竹富島方言で詞章を唱え、歌う。

【大城學『沖縄芸能史概論』(2000・砂子屋書房)】

アマナンチ
《天人》

・この狂言は五穀豊穰の種子を授けるため、「天人」が舞い降り、作物の作り方を教え村人達を激励し、天人は天に舞い戻るという筋書きのもので、仲筋村の例の狂言として古くから伝えられて来た。

天人のセリフは沖縄本島の方言で演じられ、口調が組踊り調である。島の古老達は、それらの類を「キョングンムニ」(言^マ狂^マ言葉)と呼び、他には鬼狂言等がある。

【玉城憲文『竹富島の仲筋村の芸能』(1976・オリジナル企画)】

・村の祭が天に通じ、天人が芋、麦、綿などの種子を村の長老に与え、耕作、播種、収穫などの農法を伝授するという狂言である。この狂言では沖縄本島の方言が使用される。

【上勢頭亨「種子取祭に演じられる芸能」『竹富島誌 歌謡・芸能篇』(1979・法政大学出版局)】

• この狂言は五穀豊穡の種子を授けるため、「天人」が舞い降り、作物の作り方を教え村人達を激励し、天人は天に舞い戻るという筋書きのもので、仲筋村のチの狂言として古くから伝えられて来た。

天人のセリフは沖縄本島の方言で演じられ、口調が組踊り調である。島の古老達は、それらの類を「キョングンムニ」(言^マ狂^マ言葉)と呼び、他には鬼狂言等がある。

【亀井秀一『竹富島の歴史と民俗』(1990・角川書店)】

• 天人が作物の種子を村人に与えようとやって来る。一方、村の年方(長老)は、種子取の願いをしようと、村の若者たちを引き連れて出かける。天人と村人が偶然出会い、年方が天人から作物の種子を拝領し、作り方を教わる。天人が立ち去った後、農作業を舞踊化したマミドーを踊って退場する。

【全国竹富島文化協会編『沖縄県竹富島の種子取祭台本集 芸能の原風景』(1998・瑞木書房)】

• 「天使」狂言は、天界の使者天使が粟、麦、芋、稲などの種子を古老に授け栽培方法を村の人々に教え豊穡を迎えることを願って天界に去る。古老は経験豊かな知識者として神を初め、筑登之親雲上からも信頼される存在である。

【大田静男「琉狂言—琉球芸能の新視点—」『文学』季刊 第9巻 第3号 (1998・岩波書店)】

《鬼捕り (鬼^{ウンキョウギン}狂言)》

• 鬼狂言は竹富島仲筋村の新田長輝の祖先が高那村(現在廃村)から伝授されたと伝えられている。鬼の面は、「畑屋の願い」に使われている猿の面と同時期に宮良廉可が作ったとの言い伝えがあるので、およそ百年以前の伝承と思われる。以前は鬼一人であったが、昭和八年に石垣信知により新しく男鬼が作られたので、古い面は女鬼として二人出演となった。

要旨は、沖縄本島本部山の山奥に、人喰い鬼が住んでいるとのことが上位(王府)に達し、早速その鬼を退治するよう福仲ペーチンに指示があった。

よって福仲パーチンは、佐久間里主と本村里主の協力を得て無事に鬼を退治するとのストーリーである。

【亀井秀一『竹富島の歴史と民俗』(1990・角川書店)】

• この芸能は、西表島の古見から竹富島に伝来したといわれているが、もともとは沖縄本島の芸能で、登場人物は首里方言で語り、舞台も沖縄本島の^{もとぶ}本部山である。

福仲親雲上という棒術使いの武士は、本部山に住む人喰い鬼を生け捕るようにとの命令を受ける。福仲親雲上は、剣の達人である本村里主と、空手を得意とする佐久間里主とともに、本部山の鬼退治に出かける。

一方、両親に捨てられた兄弟は、叔父さんに会うために、本部山の山中を歩いていたが、兄は鬼にさらわれる。

本部山に到着した三人の武士は、それぞれの得意の技を披露して気持ちを落ち着けた後、鬼を探索して夫婦の鬼を捕らえ、兄を救出する。

兄からお礼を言われた福仲親雲上は、「本村里主と佐久間里主には鬼を飼育させ、我はこの二人の子を育てよう」と言って退場する。

【全国竹富島文化協会編『沖縄県竹富島の種子取祭台本集 芸能の原風景』(1998・瑞木書房)】

《する掬い狂言》

• スル掬い狂言は二十五年ぶりに、古老の指導により昭和五十年の種子取に復活した狂言である。

この狂言は多少エッチな場面もあるが、竹富島の生活様式をよく描き出し、民俗性をおびた爆笑劇として昔から永い間親しまれてきた。出演者、マイチ、ヌベマは仮名で、その年毎に名前は入れ替わる。例として村の役職員の、奥さんの名が呼ばれるのが習わしである。

この狂言は島の古代の性風俗を描いたものであるが、従来タブーとされている性については現代も古代も変りはないが、それが陰湿な形態ではなく、極く自然に古代の性風俗が戯曲化して島の風土の中に生きてきた、ということは他の民俗芸能に類を見ないすばらしい特異なものと思われる。

【玉城憲文『竹富島の仲筋村の芸能』〈1976・オリジナル企画〉】

・スル掬い狂言は二十五年ぶりに、古老の指導により昭和五十年の種子取に復活した狂言である。

この狂言は多少エッチな場面もあるが、竹富島の生活様式をよく描き出し、民俗性をおびた爆笑劇として昔から永い間親しまれてきた。出演者、マイチ、ヌベマは仮名で、その年毎に名前は入れ替わる。例として村の役職員の、奥さんの名が呼ばれるのが習わしである。

この狂言は島の古代の性風俗を描いたものであるが、従来タブーとされている性については現代も古代も変りはないが、それが陰湿な形態ではなく、極く自然に古代の性風俗が戯曲化して島の風土の中に生きてきた、ということは他の民俗芸能に類を見ないすばらしい特異なものと思われる。

【亀井秀一『竹富島の歴史と民俗』〈1990・角川書店〉】

・「するっくい」は、種子取祭りが近づいたので、女性二人が、海岸に寄ってくる「する」（きびなご）の群れを捕りにいくことになった。しかし細い腕の女性達は石垣から来た鬼のように力が強いが間抜けの男（士族？）オンザを利用しようとする。女二人は間抜けの男を、ほめたりおだてたりして首尾よくキビナゴを獲り終えるという筋。

・竹富島で上演されている「する掬い」は、士族を風刺した狂言のため近年まで老人たちはこの演目の上演中止を若者たちに申し入れたこともあったという。

【大田静男「琉狂言—琉球芸能の新視点—」『文学』季刊 第9巻 第3号 〈1998・岩波書店〉】

・「する掬い狂言（するふくいぎょんぎん）」は、八重山諸島の竹富島で毎年旧暦九月か十月の甲・申の日から十日間行われる「タニドゥル」（種子取祭）の八日目に世持御嶽の境内の舞台で演じられる。仲筋村（集落）で継承されている狂言である。〈する〉はアミアイゴ（アイゴ科）の小魚で、ニンニクと一緒に塩漬けにして種子取の供物に使われる。

この狂言は、毎年、プログラムの中ごろか後半に演じられる。竹富島の〈笑し狂言〉の中では、人気のある演目である。

出演者は三人で、そのうちマイチとヌベマは女性で、年毎に名前が入れ替わる。(中略)村役人の奥さんの名前であったり、青年会の女性の名前であったりする。マイチとヌベマは竹富方言で詞章を唱えるが、オンザ(男性)は石垣島方言を使う。方言の洒落もある。

【大城學『沖縄芸能史概論』〈2000・砂子屋書房〉】

・「種子取祭」が近くなって、いよいよ「スル」がやって来た。連れ立って、早速「スル掬い」に行こう。そしてそれを沢山準備して「供物を飾り今年ん世果報を賜らる様」に祈ろう」と言っている。

冒頭のこの場面は、一見然気無い遣取りから始まっている。しかし二人の問答は明らかに「祭り」への準備、もしくは予祝を訴えているわけで、状況設定としては見逃せない内容にあると思われる。しかもその言挙げの端緒というか契機は、紛れもなく「スル」の到来を告げている。しかして、この事はまことに看過し得ない事実であって、「祭り」、すなわち種子取祭の準備は、毎年の「スル」の到来を期して始まるといった事態を示唆しているのではなからうか。毎年、季節を定めて浜に押し寄せて来る「スル」の大群をもって、竹富島の「種子取祭」の幕は切って落とされたのだ。

【野村純一「ユングトゥと早物語—「神の座のスル」に寄せて—」『星砂の島 第六号』
〈2002・瑞木書房〉】

タクトウイキョウギン
《蛸とウリ狂言》

・この狂言は自給自足時代の生活状況を描きだしたもので、とくにキザラ(祭事)が近づくと村は活気付き、食卓を飾る海の御馳走はなくてはならないもので、島の人達は貝、魚、蛸をとりに磯に出かける。そのなごやかな風景を狂言化したもので島の風俗習慣を良く現している。

【玉城憲文『竹富島の仲筋村の芸能』〈1976・オリジナル企画〉】

《タナド一屋》

• この狂言は、別名マチッチャ狂言とも呼ばれ、明治の末期人頭税は廃止されたが、ユカル人（士族）、アカブザ（平民）制度は昭和の初期頃まであったと言う。

当時、竹富島から石垣島に渡り農作物を売り歩く人達を竹富アカブザと罵ったらしく、竹富島の人達はその怒りを即興に舞台の上で演じ、平民達はユカル人へ挑戦したのである。

娯楽のない時代、島の若者達は大きな石を持ったり、角力をとったり、力くらべの遊びが盛んであったようで、それもユカル人への抵抗であったのではなかろうか。

この狂言は、そうした昔の様子が描き出され、当時を知る上での貴重な芸能と言えよう。

尚、この狂言は人頭税廃止後から昭和十九年まで連続上演され、人気の的であったようだが、終戦と同時にユカル人、平民制度は民主々義に追いやられ、時代と共にこの狂言は舞台から姿を消した。

三十年余の空白で忘れ去られたが、今回の著書発刊を機に古老、大山功、生盛康安、加治工政智、生盛多良の諸氏の協力を得て収録した。

【玉城憲文『竹富島の仲筋村の芸能』〈1976・オリジナル企画〉】

タニマイチョンギン 《種子蒔狂言》

• 最初に鉢巻のものが出て口上あり、四人を呼ぶ。二人は種ものを入れた籠を棹に通してかつぐ。一人がその籠を受取り、祝詞をのべ種を播く。問答あり、歌もうたふ。約三分。

【本田安次『南島採訪記』〈1962・明善堂書店〉】

• 世持は今日は、私の畑に行き、新しい農法を教え、明日からは村の子達が、一人立ちで好んで農業を営むことが出来るようにと云うことで、けっして強制ではない。世持ちは飾口の中で、農業の在り方を、くわしく教えている。飾口のはじめに「来年はら先や、君達ど飾るどー」と唱えているが、それは来年からは君達だけでしなさいと云う強制ではなく、今年は私が唱える、し

かし、来年からは君達が唱えなさい。という意で、飾口の中に新しい農法が、たっぷりと唱えてあり、皆に早く覚えてもらう為である。

【玉城憲文『竹富島の仲筋村の芸能』〈1976・オリジナル企画〉】

・三、種子天授（狂言） 天使の狂言。俗に世持狂言ともいう。「豆ドウマ」の踊りが入る。白襦袢に白ズボン、赤櫛を掛けて鋤で「豆ドウマ節」にのせて耕地する。二人は鋤を持って草を除る所作をする。囃子は「鋤持ち」がする。そして最後に「今日ヌ願イヤ、吉イ願シヤシ」云々のこの狂言最後の文句を述べる。

【喜舎場永珣「竹富島の種子取について」『八重山民俗誌』上巻〈1977・沖縄タイムス社〉】

・この狂言は世持が先に立ち、多勢の村の若衆を引き連れて粟を蒔き入れる所作をなす。「ウラヌ子ヌメー」「ウンヌ子ヌメー」「粟種子入」などが出る。この狂言には最後に「種子蒔きの詞口（神口）」が入る。蒔く人がとなえる。そして鋤で草を取る時にうたう歌が入る。（中略）詞口はまた「鍛冶工狂言」やその他種子取祭の時の語り言葉である「犬ぬ毛、猫ぬ毛、石ぬ実入り、金ぬ実入り」などの文句があつて、丁度川平の「まやぬ神」の時の神口の内意にほとんど近い。往昔における八重山島の五穀豊穰を祈願する際の祈願口が共通していたことを物語っている。

・この狂言はどちらかという、むしろ狂言というより祝詞にその生命がある祈願口である。出だしは「バナドゥ、クウスク屋（屋号）ヌ、御主前、ユー。」と言って現われる。クウスク屋とはこの祝詞（カザリグチ）を述べる人が自分の屋号を名乗るのである。ゆえに述べる人によってその屋号はそれぞれ異なる。そして「役人主ぬ、朝晩夕晩、説いき、云々」の文句で語りはじめるが、その「ミシャグヌ、カザイングチ」にこの狂言の生命がある。登場人物は「フンガシラ」（組頭）一人に「フンヌファー」（組の子）四人である。「カザイングチ」は組頭が述べ、「組ぬ子」にそれを説き聞かせる。その時「組ぬ子」達は除草をする仕草をして、じつとこの「組頭」の祝詞をきく。またの名を「ミシャグ狂言」とも呼ぶ。

【喜舎場永珣「竹富島の種子取について」『八重山民俗誌』上巻（1977・沖縄タイムス社）】

・タニマイ（種子蒔） 種子取の良き日に世持（組頭）が組子（フヌフウ）を呼び畑に出かけ粟の種子を播きその播いた種子が順調に発芽をなし十分な肥培管理に努め豊作を得てよい天気収穫が出来、納税の義務が果され、残余の穀は倉に入れ尚神酒を造り神への感謝ができる様にと祈願する狂言である。世持一名、組子四名、迎えの子供一名で演ずる。唄、シキタ盆。

【東田正祥「竹富島の民俗芸能」『八重山の民俗芸能（1） 沖縄県文化財調査報告書第20集』（1979・沖縄県教育委員会）】

・原名を「ミシャグ・ヌ・カザングチ」（神饌の飾り口上）と云ふ。即ち祭の時、神前に神饌を供することを述べたものである。併しその神饌は容易に得られるものではなく、農人の不断の努力と神の篤き加護とに依って喜び溢るゝ幸を齎らすのである。この飾詞は右の次第を述べたもので、即ち期日の勘定から起つて耕地、播種、発芽、除草、成熟、収穫、運搬、神卜、神酒、神饌、年貢上納、貯蔵、饗宴に終つて居る。要するに此飾詞は新稲を神と人との饗することを述べたもので、恰も新嘗祭に行はせられる行事のやうな感がある。

此「ミシャグ・ヌ・カザイングチ」（神饌の飾り口上）も「ミシャグ・キョングン」（神饌狂言）と云ふものがあつて、その最も重要な部分に当るものであることは云ふまでもない。

【宮良當壯「竹富島の狂言」『宮良當壯全集』13巻（1981・第一書房）】

・この狂言は、粟の種子蒔きを舞台の上で再現する儀礼的な芸能で、世持が唱える飾り口（祝詞）が中心になっている。その飾り口（祝詞）は、粟の播種・生育・除草・収穫・収穫祝いまでの過程を丹念に唱えており、それは、神司の呪詞やユークイ歌の「稲が種子アヨー」とほとんど同じ内容である。すなわち、種子蒔きの段階で、収穫するまでの理想的な過程を唱えることによって、これから蒔く種子が唱えたとおりに稔ることを期待し、予祝してい

るのである。

尚、退場の際に歌う「しきた盆」は、古謡として歌われていた当時の歌い方であり、現在歌われている舞踊曲の「しきた盆」とは、歌い方が違っている。

【全国竹富島文化協会編『沖縄県竹富島の種子取祭台本集 芸能の原風景』〈1998・瑞木書房〕】

ハルヤヌニガイ サルキョングン
《畑屋の願い（猿狂言）》

・組踊「花売りの縁」の中で、猿引ざるひきが登場して猿の芸能を披露する場面がある。その場面を抜き出して構成したのが、「畑屋の願い」である（中略）。

「花売りの縁」の作者は、高宮城親雲上たかみやぎ べーちんで、1800年頃に成立した作品であるが、その内容は、行方知れずの夫を捜して、沖縄北部の山原やんばるへと旅をする母子を描いている。母子は、旅の途中、猿引や薪取りに出会い、最後に花売りをしている夫と巡り合っ、親子ともに首里の都に帰るという物語である。

かつての種子取祭では、「花売りの縁」を演じていたが、近年は猿が登場する「畑屋の願い」を演じるようになった。

「畑屋の願い」は、主とアヤーすーの夫婦が畑小屋で種子取の願いをした折り、猿引に出会って、猿の芸能を観るという筋である。

【全国竹富島文化協会編『沖縄県竹富島の種子取祭台本集 芸能の原風景』〈1998・瑞木書房〕】

・仲筋村に狂言「畑屋の願い」という、一見、組踊の「花売の縁」を思わせる演目がある。かつて種子取祭では「花売の縁」を演じていたというが、近年では「畑屋の願い」が定番となっている。両者は、猿引きが登場して猿の踊りを披露する場面や、しみじみとした夫婦の愛情を扱っている点で共通するが、主題に大きな違いがある。

「花売の縁」は、故郷を離れ、山原を放浪する森川の子しーを、人づてに聞きながら探し求める妻子が、森川の子と再会するという内容である。戦後、石川の収容所で上演されたとき、わが身の境遇と重ねあわせた観客のすすり泣きが、会場いっぱい広がった、というエピソードが物語るように、家族の

絆の強さといった人情が主題である。

「畑屋の願い」は、そのタイトルの通り、畑小屋の願いが主題である。畑小屋の御神加那志へ祈願する「物作いぬ色々、満作しみてい、賑合一し、御賜び召そーり、尊」の台詞が主題を端的に表している。また、最後に夫婦が「浮島節」に合わせて踊るが、妻は夫を置いて先に幕内へ入る。夫は「アヤーよ、アヤー」と妻を探しながら退場する。二人が去った舞台には、ほのぼのとしたユーモアが残る。

「花売の縁」と「畑屋の願い」を比べると、両者がますます似て非なるものであることがわかってくる。村人は祭祀のテーマを意識して、種子取祭の舞台によりふさわしい「畑屋の願い」を番組に選択していったのではないかと、思う。そのことで種子取祭の主題が、さらに強調されるのである。

【飯田泰彦「畑屋の願い」『沖縄タイムス』2000.12.6】

《ホンジャー》

・仲筋のホンジャーは仲筋家（生盛家）の当主、玻座間のホンジャーは国吉家の当主が務めると決まっております、それぞれの床の間には、ホンジャーを神として祀っている。初めて種子取祭の芸能に参加する者は、ホンジャーの神前で「新入り」の儀式を行う。また、芸能の役割を決めて練習を始める甲申のトゥルッキでは、芸能を演じる人々が「手の誤り・足の誤りもなく、きちんと演じることができるように」とホンジャーの神に祈る。

種子取祭二日目の奉納芸能は、仲筋村の担当なので、仲筋村の仲筋家（生盛家）の当主が、ホンジャーに扮して舞台に登場し、豊作の祈願をした後、村の役人様に芸能上演の許可をいただく口上を申し上げ、子や孫たちに「芸能を披露しなさい」と述べて退場する。

【全国竹富島文化協会編『沖縄県竹富島の種子取祭台本集 芸能の原風景』（1998・瑞木書房）】

竹富島玻座間村

アマンシ
《天使》

• 板橋に七、五、三歳の子供を乗せて、東西両方から来る。南からは天使が板橋に乗って来る。両者が会ったところで、次の天使の言葉があり、子供に天使から贈り物を授ける。天使の言葉がおわると、それぞれ東西、南にと別れる。

【上勢頭亨『竹富島誌 歌謡・芸能篇』(1979・法政大学出版社)】

イージマ グワ
《伊江島ハンドー小》

• この芝居は沖縄三大歌劇といわれ、大正13(1924)年真境名由康氏の作で、八重山では知名士の方が演ぜられていた。

その中には新井潔氏も含まれており、昭和44(1969)年の「あずま会定期総会」で新井潔氏の演出により「伊江島ハンドー小」を青年部が演じ、その年の7月には「竹富美化促進基金造成演劇発表会」でも演じており、そのときの脚本を整理執筆されたのが新井潔氏である。

芝居の内容は、一夜の恋とは知らないハンドー小は、愛しいカナー兄に会うために、伊江島に渡るが、村人にはひやかされるし、カナー兄は一夜の遊びだったと相手にせず、ハンドー小は死を覚悟で島村屋の主人とも掛け合うが、さんざん罵られ追い出される。とうとうハンドー小は首を吊って死んでしまう。

その後島村屋では、その報いをうけ、次々と悲惨な事故がおきる、という筋書きになっている。

【古堅博「悲恋歌劇 伊江島ハンドー小」『新井潔米寿記念 竹富島座真村の狂言』
(2000・新井潔)】

ウフアラグスクチュウユウデン
《大新城忠勇伝》

• この演劇は、1555(弘治1)年、尚清王の死後、長男の尚元と異母兄弟で次男の尚鑑心が、王位継承問題で争いがあったという伝承に基づいて、渡嘉敷守良が、琉球史劇として創作し、1905(明治37)年に、初めて演じたものである。

竹富島では、昭和15(1940)年頃までに種子取祭で演じられていた。復活

するために、新井潔氏が、竹富島で演じられていた内容の脚本を作成し、平成2（1990）年に50年振りに種子取祭で復活上演した。

この演劇の内容は次のようである。

ほとんどの親方たちは、ことばの言えないチーゲーの長男より、聡明の次男を王位に立てた方がよいということに対し、時の三司官大新城親方ひとり、尚清王の遺言を守るべく奮闘し、長男の前にひれ伏して、「一言何とか言わなければ、切腹して先王にお詫びしなければならない」と言って、短刀を腹に立てて迫った時、長男が「大新城待て」と言ったことばに大いに喜び、「今日の誇らしゃや なをにぎやなたてる つぼでをる花の 露きやたごと」と歌って踊ったと言われている。尚元王の時代から「かぎやで風節」は、この歌詞で歌われるようになったと伝えられている。

【高嶺方祐「琉球史劇 大新城忠勇伝」『新井潔米寿記念 竹富島玻座真村の狂言』

〈2000・新井潔〉

《ガイジンナー》

・この劇は、敗戦（1945年）前から種子取祭で演じられていた。戦前は沖縄方言（ウチナーグチ）で演じられていたが、戦後のある時期は全国共通語（ヤマトグチ）で演じられていた。1989（平成元）年より、また、ウチナーグチでやるようになり現在に至っている。演題は「高利貸し」で演じられた時もあるが、現在は「ガイジンナー」の題名で演じられている。

劇は、う旦那様と呼ばれるガイジンナー（一種のたね物入れ籠）等を買っている観光土産店の主人が、妻に内緒で儲けた金をガイジンナーに隠した。それを見ていた高利貸しはガイジンナーを全部買い取るが、隠した紙包みの金はない。一方店の主人はガイジンナーが全部売れているのを知って番頭を怒る。隠した金はどこにあるのかを追ってストーリーは展開されていく。金銭欲に凝り固まった人間社会、拝金主義を痛烈に風刺した喜劇となっている。

【石垣久雄「現代喜劇 ガイジンナー」『新井潔米寿記念 竹富島玻座真村の狂言』

〈2000・新井潔〉

カザグチョンギン
《鍛冶工狂言》

・前結びの白鉢巻、着物、黒帯、足袋のもの、はじめ一人が出、一口上あって呼ぶと、向って左の幕かげから三人が出る。夫々槌、鞆、箱をかつぐ。後着物をぬぎ、仕事着になり、鍛冶の態を演ずる。掛声を掛け、歌もうたふ。終に道具をかついで、一まはりして入る。約八分のもの。

【本田安次『南島探訪記』〈1962・明善堂書店〉】

・竹富島では、種どり祝が最も盛大に行はれる。その祭の催しの最初に
鍛冶工狂言、組頭、種まき狂言

の三つが毎年必ず演ぜられる。私が訪ねたときにも、特に演じて下さった。五穀豊穰を祈る祭であるから、「ふんがしや」や「種まき狂言」があるのはよくわかるが、なぜ鍛冶屋の狂言があるのだろうか。といふのが不審であった。—これは、農耕者にとって鉄製の農具は甚だ有難かったに相違なく、そこで鍛冶屋の繁昌をことほいだもののやうである。鍛冶屋の狂言は、内地の長野県や愛知県の田楽の中にも伝えられてゐる。「春鍛冶」などと言って、春先に村々へ訪れてくる巡業の鍛冶屋に取材してゐる。田楽で演じてゐるのは、やはり農耕に関係深い鍛冶に心をよせてのことであらう。その意味が、こちらの伝承を聞いてよくわかった。

宮良当壯氏の「南島叢考」に収められた「鍛冶工狂言」の台本を読むと、これが狂言かとあやしまれる程である。少なくとも長々しい祝詞が中心をなしてゐる。しかし演じてもらったのを見ると、やはり狂言に相違はなかった。最後を踊にして引込む。

【本田安次『南島探訪記』〈1962・明善堂書店〉】

・いかにも簡単で、素朴で、作意がなさすぎ、封建時代の竹富島の百姓の生活の中から生まれたままの、土のおいがただよう笑劇である。役人主から命じられた通りに、納税のための粟を作り、島民の主食としての甘藷を作る。そのための農具作製過程に生じた滑稽を、主題としたものであるが、当時、上納の穀類は、米・粟・稗の類であるが、竹富島は僅かな地下水以外に水が無いので、水田はない。したがって、粟は、島では、最上の穀類である

が、それは、農民の口には入らない。甘藷だけが、百姓の生命を支える唯一の主食であった。そうした誅求に対する不満も、まして反抗も、この狂言には微塵も反映していない。与えられた社会制度になんら疑問を持たず、ひたすら豊作を祈る農民の心だけが、この作品全体を明るくしている。

本土の狂言の笑いの一種に、愚鈍な大名を、気の利いた庶民が愚弄する諷刺的なおかしさがあるが、この狂言には、そうしたものはない。同僚の前打ちの一人が、相手に向かって馬鹿野郎呼ばわりをし、そして又、これと同じ身分のふいご押しが、焼けた鉄に対する一人の前打ちの無知と、二人の前打ちのもつれて滑稽な会話のやりとりとに対して馬鹿奴郎^(ママ)という。平等の立場に立つ人間同志間の無知や判断力のにぶさに対してのせせら笑いが、この狂言の笑いの性質である。」

【松田武夫「沖縄八重山群島竹富島の「鍛冶屋狂言」について」『宇都宮大学教育学部紀要 第17号第1部』(1967)】

- この狂言は年貢上納米のことから語りはじめ、鍛冶の日和、鍛冶の製作、鍛冶の伝来、そして農具製作によって世果報を祈願すると言った具合になっているが、その詳細にわたる内容は本来の狂言というよりむしろ村落共同体の農耕生活に密接に結びついた生活史を語り綴っている所に特色があるといえよう。その事は他の「例狂言」に於いても等しく言えることである。

【喜舎場永珣「竹富島の種子取について」『八重山民俗誌』上巻 (1977・沖縄タイムス社)】

- 鍛冶工は昔から農の元と伝えられている。種子取祭には最初鍛冶工狂言を演じる。竹富島に鍛冶屋を設け農具を作製し農民に与え農作は便利となり収穫は増加し割当られた人頭税は安心して納めることの出来たのは全く鍛冶屋主のお蔭であるとの深い意味である。

【東田正祥「竹富島の民俗芸能」『八重山の民俗芸能(1) 沖縄県文化財調査報告書第20集』(1979・沖縄県教育委員会)】

- 農具「鋤、鋤」を作る古典的で真面目な狂言である。配役は、鍛冶工主

一人、フイゴ役（フケー）一人、前打の部（マイウチヌベ）二人の計四人である。

まず鍛冶工主が出て来てあいさつする。あいさつの中に「つかいばかんよう道具かんよう」ということばがある。これは「弘法は筆を選ばず」という思想ではなく、「農耕するには道具が第一だ」という考え方であり、竹富の人が、いろいろなものを工夫して創り出すことにつながっていると考えられる。たとえば造船などである。造船のはじまりは竹富島からだといわれている。

鍛冶をはじめる前に、鍛冶工主が豊作を祈る「飾り口」をとる。鍛冶は、最初鍬を打ち、次に鉦を打つ。鍬、鉦を打つときに、フケーは歌をうたうが、その歌に竹富への鉄の渡来、鉄の出所が歌われている。

大和ぬ島から 渡さばえー
山城ぬ国から 移さばえー
八重山 竹富に 買い込みてい

また八重山の歌には、人頭税を完納した喜びが多くうたわれており、この狂言の「飾り口」にも同じようなことが言われているが、逆に、帰りの歌には、人頭税への抵抗が歌われており注目される。

【上勢頭亨『竹富島誌 歌謡・芸能篇』（1979・法政大学出版局）】

・実に敬虔な祭祀の有様を髣髴せしめて余りあるものである。又この「カザングチ」に依り当時の鍛冶の仕事を知ることにも出来る。所謂「大金長金」を焼いて餅の肌の如く柔かになし、或は赤土の粉の中に転がし、或は粘土の溶けた物をかけ、再び之を赤く焼いて幾度も金床の上で打叩き、鉄と鋼との継目無きまでに融合させ、斯くして欲する所の「使ひ齒道具」を製するのである。「鍛冶を生らす」と他動詞的に用ゐた所に彼等の苦心の状が見える。更にこれにも叔母神妹神の信仰が現はれてゐる。

【宮良當壯「竹富島の狂言」『宮良當壯全集』13巻（1981・第一書房）】

・鍛冶工主が登場し、^{かざくしゅー}輔親父・^{ふけいーじゃ}前打（大鋌打）の甲と乙を呼び出して鍛冶に出かける。鍛冶工主は、鍛冶を始める前に、鍛冶の^{かざんぐち}飾り口（祝詞）を唱え

る。飾り口では、鞆・竈・^{かま}鋤・鋏・金床・木炭などの鍛冶道具を列挙するが、これらの鍛冶道具は単なる道具ではない。鍛冶の神様としてご来臨下さるようにと祈っているのである。

【全国竹富島文化協会編『沖縄県竹富島の種子取祭台本集 芸能の原風景』〈1998・瑞木書房〉】

- 「鍛冶工」では登場してきた親方がのっけから、「役人衆が朝晩説いて教えなされることには…」と始まる。そして村の働き手全員に行き渡らせるよう、立派な道具ができますようにと願い口を唱えて鍛冶を打つ。

その間にこっけいな所作があって、会場を沸かせたりする。退場する時の歌は大和から鍛冶が渡って来たことを示しているが、粟を作ったら官のため（税）、だが芋が実ったら自分のもの。どうか実らせてください、と歌って退場していく。税収向上のためにこき使われているのだが、最後には知らんぷりして引っくり返すのだから、この作者は大したものだ。

【上勢頭芳徳「種子取祭と人頭税」『人頭税廃止百年記念誌 あさばな』〈2003・八重山人頭税廃止百年記念事業期成会〉】

《奇跡》

- この劇は、敗戦（1945年）前から種子取祭で演じられている。劇の内容からして「三助の人情」とか「国勢調査」と題して演じられた。国勢調査の題名は、国勢調査のため山原に出張するストーリーからつけられたものようである。1986年頃より「奇跡」という題名で演じられるようになった。セリフは戦前は沖縄方言（ウチナーグチ）で、戦後は共通語（ヤマトグチ）の時もあったようだが、現在はまた、ウチナーグチで演ずる劇となっている。

物語は、時岡親子を盲目と啞にした前川とその婚約者、松枝（実は時岡の妻）との策略を中心としたもので、最後は人間の道に背く前川等を懲らしめ、時岡親子は善意ある人々と神仏の加護により、目が見え、話ができるようになる。まさに奇跡が起こったのである。という、勧善懲悪の人情劇となっている。

【石垣久雄「人情劇 奇跡」『新井潔米寿記念 竹富島玻座真村の狂言』〈2000・新井潔〉】

《曾我兄弟》

・鎌倉時代初期の仇討ちを語る『曾我物語』は、1300年前後に成立した準軍記物語である。その内容は、工藤祐経くどうすけつねと河津三郎祐重かわづさぶろうすけしげの争い、祐重の遺児である兄の曾我十郎祐成そがのじゅうろうすけなりと弟の北条五郎時宗ほうじょうごろうときむねの仇討ち、母親に勘当された弟時宗と兄祐成の小袖を巡る兄弟愛、源頼朝を感服させた弟五郎時宗の弁舌など、さまざまな話が盛り込まれているが、曾我物語が成立した要因は、仇討ちに生きる曾我兄弟の生涯を語って、その怨霊を鎮めるためであったと考えられている。

この『曾我物語』を典拠として、謡曲・幸若舞曲こうわかぶきょく・浄瑠璃・歌舞伎など、数多くの演劇が生まれたが、我が竹富島の「曾我兄弟」は、幸若舞曲の「夜討曾我ようち」との関わりが深いように思える。しかし、我が「曾我兄弟」は、幸若舞曲の「夜討曾我」を直接典拠にしたのではなく、無声映画から学んだようである。我が「曾我兄弟」には、場面の説明と登場人物のセリフをゴチャ混ぜにする傾向があり、無声映画の弁士のセリフを連想させるからである。

【全国竹富島文化協会編『沖縄県竹富島の種子取祭台本集 芸能の原風景』(1998・瑞木書房)】

《貞女と孝子（辻騒動）》 テイジョ コウシ

・明治後期の作とされ作者不明。竹富での当たり役は、夫役に前新長成、妻役玉盛淳正で、種子取でも上演されていたものを、昭和十四年母、イカビの還暦祝いに潔が初出演したものである。

この芝居は、妻子のある父親が那覇辻の尾類女と囚って、家にある衣類など金目のものをすべて奪って山原方面へ駆け落ちしていく。残された妻子は貧困の中にも志を立て、昼夜にかけて働き長男の三良を出世させ豪華な暮らしとなる。一方逃げた夫は尾類女に死別して乞食の暮らしで放らうの生活である。どうやら那覇に辿り着き、新聞の記事を見て若しやと思い家を訪ねる。妻は昔のこともあり、なかなか家に入れてくれないが、夫は強引に押し入り、立派になった我が子との再会を果たす。ようやく、妻の勘気も解けて孫も抱くことができ大団円となる。

【新井潔「貞女と孝子（辻騒動）」『新井潔米寿記念 竹富島玻座真村の狂言』（2000・新井潔）】

《農村早起唄》

・別名「早起デンスー」ともいわれ、作年代は明治後期、作者は大堂のヤムージャー（やまーおじさん）と与那国清介氏の説。住居は、竹富354番地稲福家の門向いに大堂ツル商店があり、当主ツルの義父に当たる。昭和初期東京転籍。

あらずじは、翁と嫗、若夫婦と孫の姉弟、家庭円満、親子の早期から夕刻までの生活の様子を「でんさ一節」の調子にのせて、道徳上又は人として守るべき道など教訓的構成となっている。

【新井潔「農村早起唄」『新井潔米寿記念 竹富島玻座真村の狂言』（2000・新井潔）】

《ハイカラ娘》

・この芝居は歌劇で、娘と紳士に車引きで構成され、戦前から村芝居的に演ぜられ、戦後もしばらく祝いの座では爆笑歌劇として人気があり面白かったのだが、決まった原稿がなく、与那国清介、新井潔諸氏によって原稿が整理され、脚本として完成させたのは、新井潔氏である。

この芝居の内容は、一人娘の婿になる男が来るとのことで、兄がいろいろと礼儀作法を教えている。婿になる男はケガをした車引きの車でやってきて、貴方の夫になる男は私です、と言うと、娘は学校は、仕事は、月給はと聞く。

中学中退で代用教員、月給は33円35銭という、娘は文明開化の世の中でこれだけの月給では結婚はできないと追い返す。そこで男は車引きと相談をし、車引きを県庁の知事に仕立て再度娘に挑戦する。

今度は大学卒業で県庁の知事、月給も3万3千円、娘は喜び貴方が私の夫になる人ですと、家の中へ案内するが、怪我がばれ車引きとわかり追い出す。

男と車引きは気が納まらず、また何やら相談をし、今度は替え歌でさんざん娘をくさし、やり込めてハッピーエンド。

【古堅博「歌劇 ハイカラ娘」『新井潔米寿記念 竹富島玻座真村の狂言』（2000・新

井潔】

《伏山敵討》

• この組踊の作者や作成年代は不明であるが、多くの地域で演じられていたようである。

明治38（1905）年頃、沖縄本島から来島した中山助枝によって、竹富島玻座真村に伝承された。組踊本はあるが、竹富では台本に頼らず専ら口承で行われてきた。また台本は三段構成になっているが、種子取祭での時間の問題や雰囲気の関係で、動きが少なく歌だけの二段を削除して演じられてきた。戦後一時期、出演者の関係で上演が中断されていたが、昭和53（1978）年、新井潔氏によって台本が整理され、同年、種子取祭で復活されて、その後毎年上演されている。

筋書きは次のようである。

名君の誉れ高い棚原の按司は、野心家天願の按司に殺された。棚原の按司の臣下の富盛大主と亡き主君の遺児若按司は、仇の天願按司が本部山で狩りをするのを聞き、狩場で待機する。天願の按司は、富盛大主が切腹したとの噂を聞き、喜んで本部山に狩りに行くが、狩人から富盛大主が鬼のようになって、主人の仇討ちのため山中に潜んでいることを聞き、狩人に富盛のところへ案内させるが、天願とその臣下は、富盛と若按司によって皆殺しにされる。

【高嶺方祐「組踊 伏山敵討」『新井潔米寿記念 竹富島玻座真村の狂言』〈2000・新井潔〉】

フンガシャ ユッキクーシキョウギン 《組頭（薄崩し狂言）》

• 鉢巻のものが一人出て、鉢巻をとり、口上あり、呼ぶと、鉢巻、白上衣、白つぼん、脚絆、足袋、鍬のものが三人出、問答あり、先のものを先頭に、一まはり逆にまはる。かうして歌をうたひつゝ、土地を耕す振がある。最後はその場に一まはりして入る。約五分のもの。

【本田安次『南島探訪記』〈1962・明善堂書店〉】

• この狂言は薄を耕し、地拵えをして置いて、いざという時に植えようというものである。即ち薄をはね起しはね起し、開墾する有様や開墾の喜びを表現したものである。「ユリテク、ユリテク、世果報給ボラル」の唄の囃子が入る。白下着に白のズボン下、帯、タスキをしめる（四人）。そして自分の「パイ」を各自で賞める。唄は二人がステッキを突きながらうたう（下知人）。

【喜舎場永珣「竹富島の種子取について」『八重山民俗誌』上巻〈1977・沖縄タイムス社〉】

• 荒地開墾組を編成し、組頭の指導のもとに増反する作業の狂言である。鉾、鍬を持って作業の歌に合わせて踊る。

【上勢頭亨「種子取祭に演じられる芸能」『竹富島誌 歌謡・芸能篇』〈1979・法政大学出版社〉】

• 組頭が最初みんなの前で、今日は「地ごしらへ」をしたい、村の青年たちとも相談ずみだ、とあいさつをする。そして村の青年たちを呼びだして、みんなの前であいさつした同じ台詞を、今度は青年たちの前でくりかえし述べるというパターンで芸能が展開されています。

そのことは、同じ台詞を再度述べることにより農作業の趣旨を徹底させ、年貢が完納できるようにという「ねらい」が背景にあると考えられます。「くぬっこうな一、くうさりりやどう、役人しゅうや、つかいばかんよう、どんぐかんようてい、とっきたみし、おうりやし」という台詞は、これほど仕事がかどるのは役人様がいつも仕事をする時は道具がだいじだと説き教えなされたからだよという意で、役人様の教えは素直に聞きなさいということを通詞を通して島人、村人を指導していることがわかります。

【石垣久雄『八重山嶋農務帳』にみる人頭税時代の農民統制—祭事芸能を中心として—』『石垣市史のひろば 第10号』〈1986・石垣市〉】

• この狂言で、一番組頭いちばんふんがしやと言っていることから判断すると、竹富島では、村を一番組・二番組・三番組というように分けていたようで、区分けされたその小グループを「フン組」と呼び、責任者を「ふんがしや組頭」と呼んでいた。

この狂言では、組頭が登場して、「先に鍛冶をして農具を整えたので、今日はススキなどを取り除いて、畑の整地をする」と述べるが、これは「組頭」が「鍛冶工狂言」に続くものであることを示している。登場した組頭は、自分を助勢する者と、若者四人を呼び出して、歌い踊りながら農作業をして退場する。

「組頭」の面白いところは、他の者よりも自分のほうがよく働いたと、自慢し合うところで、そのセリフにどれだけ個性を出せるかという点であったが、現在のセリフは固定化されている。

【全国竹富島文化協会編『沖縄県竹富島の種子取祭台本集 芸能の原風景』〈1998・瑞木書房〉】

- 「組頭」は、村の指導者が役人から農具の手入れを充分にし、土地が湿潤っているので種子蒔きに備えて地拵えをせよとの命令を組の者や子たちに伝える。畑を耕した後、鍬や鉋などを自慢し仕事を終える。役人は使刃肝要、道具が肝要と農道具の大切さを説く。

【大田静男「琉狂言—琉球芸能の新視点—」『文学』季刊 第9巻 第3号 〈1998・岩波書店〉】

- 「組頭」では登場した年長者が、ヘラもくわも立派なのができたし、役人衆は仕事には道具が大事だと言っておられる、と若者に説いて聞かせる。現に『富川親方八重山島諸村公事帳』にも毎日の作業に遅れたものは科鞭五ツ。道具の手入れが悪い者も科鞭五ツとある。

【上勢頭芳徳「種子取祭と人頭税」『人頭税廃止百年記念誌 あさばな』〈2003・八重山人頭税廃止百年記念事業期成会〉】

《ペーク漫遊記（大名屋のかんち）》

- この芝居は、戦前、竹富島の種子取祭で演じられていた歌劇である。当時は「大名屋のカンチ」と呼んでいた。昭和54（1979）年、新井潔、新盛武雄両氏によって復活・脚本化され、同年、両氏を中心に種子取祭で復活上演された。

この芝居の内容は次のようである。

今年の村の豊作物は例年になく大豊作であったので、「在番」を招待し、村の若い娘たちの踊りで持て成した。その際、婚約済みの娘に在番の目が止まり、賄女にするため、許婚の男を島流ししようとする。その様子を知った首里王府の役人「ペーク」が、在番の悪い行いを戒めるという筋書きになっている。

【高嶺方祐「ペーク漫遊記（大名屋のかんち）」『新井潔米寿記念 竹富島玻座真村の狂言』〈2000・新井潔〉】

《北山王妃選び》

・この芝居は、戦前竹富島の種子取祭で演じられていたものである。昭和55（1980）年、石垣竹富郷友会主催「竹富民俗芸能の夕べ」で上演することを目指して脚本を整理したが、実際、復活上演したのは、昭和60（1985）年の種子取祭である。脚本整理に係わったのは、与那国清介、新盛太郎、大底健一、新井潔、与那国秩の諸氏で、脚本を執筆完成したのは、新井潔氏である。

芝居の内容は、北山の王子妃を選ぶ際、二人の姉妹に「金」か「土」を選ばせ、その理由を述べさせる。「金はこの世の宝だ」といって「金」を選んだ妹に対して、「万物は土によってできる、黄金は土の子である」といって「土」を選んだ姉が、真の王妃として選ばれる。だが、王妃に選ばれた姉は「継子」であるため、継母に虐待されて家を追い出され、代わりに、実子の妹を婚礼式に臨ませるが、最終的には、これが、母親の陰謀であることがわかり、選ばれた通りの婚礼を行うという筋書きになっている。

【高嶺方祐「北山王妃選び」『新井潔米寿記念 竹富島玻座真村の狂言』〈2000・新井潔〉】

《ホンジャー》

・ホンジャーとは、フン・イイジャーのことである。「フン」は区域・地域を表す言葉であるが、「島やりどう・国やりどう」のように、「島」の対語として使う場合は「国」という漢字を当てる。また、フンは「村」の対語として使われたり、島よりも小さな区域の意味で使われることもある。そのとき

は、「組」という漢字を当てる。イイジャーとは「父」の意である。(中略)

一般に、「村の父」という言葉には、政治的な実力者、村の指導者、支配者というイメージがあるが、このホンジャーの場合はそうではない。あくまでも、芸能の統括者・責任者であり、芸能の神様として君臨するのがホンジャーである。

玻座間村のホンジャーは、代々国吉家の当主と決まっており、国吉家の床の間には、ホンジャーの神を祀っている。

【全国竹富島文化協会編『沖縄県竹富島の種子取祭台本集 芸能の原風景』〈1998・瑞木書房〉】

《村勝負》

・喜宝院の庭先に大きな石が無造作に鎮座しているのがわかる。(中略) この石は「種子取祭」でのバラシ狂言の演目のうち「石持狂言」に由来していることは島の人以外はあまり知らない。その昔、竹富島の男と崎枝村の男がこの石を持ち上げられるか否かを競う筋の狂言。

不真面目な態度の相手に対して、那須与一よろしく真摯に神に勝利を祈願する竹富の男が見事に石を挙げ勝利するのであるが、滑稽な演出に観客は和やかになり島の歴史も伝承されてゆく。

【原政幸「のはら荘と喜宝院の石」全国竹富島文化協会『星の砂 第二号』〈1997・瑞木書房〉】

・この狂言は、戦前「石持ち狂言」として竹富島種子取祭で演じられていた喜劇である。昭和56(1981)年に、新井潔氏によって脚本が整理され、同年の種子取祭で、新井潔、新盛武雄、東里悟が中心に復活上演された。この狂言は、首里、石垣、竹富のことば(方言)で演じられるのが特徴である。

この狂言の内容は次のようである。

在番が、竹富と崎枝の役人を呼び寄せて、各村の自慢することを言わせる。竹富役は「竹富には『しきた盆』という優れた歌がある」と言う。崎枝役は「崎枝には『崎枝節』とあって、竹富の『しきた盆』より面白い歌がある」と言う。そこで、歌の勝負をさせるが、竹富の勝ちとなる。負けた崎枝役は、

「力勝負」をしたら崎枝が勝つと言って、挑戦する。竹富からは新里比屋久、崎枝からは前盛屋真多が選ばれ、「石持ち勝負」をするが、また崎枝が負ける。

この狂言の特に面白いところは、崎枝の屋真多が、誇張した自慢話をしたり、石に押さえられ、やっと助けられても、まだ負けないとあって、腕相撲までやり、また負けるが、「勝負なし」と言って退場するところである。

【高嶺方祐「村勝負」『新井潔米寿記念 竹富島座真村の狂言』〈2000・新井潔〉】

《世曳き狂言》

・ 十 祝、豊年

世乞いの踊りである。床几を持ち、杖を持って出てくる。五穀の種子の外に木綿を上にした車を「ミンサー帯」で二人の若者がこれを曳いて出てくる。「二才踊り」で囃子を入れる。子、孫の五歳位の女の子が錢太鼓の錢を打ちながら踊る。

【喜舎場永珣「竹富島の種子取について」『八重山民俗誌』上巻 〈1977・沖縄タイムス社〉】

・ 願いが叶い、豊作を賜ったので、神前に豊年を感謝するという狂言である。

村の総裁役が、子孫を伴ない、五穀を積んだ車を二歳達に引かせて登場し、二歳達が世果報口説、子孫がジュンサーミをにぎやかに踊る。

【上勢頭亨「種子取祭に演じられる芸能」『竹富島誌 歌謡・芸能篇』〈1979・法政大学出版局〉】

・ 竹富島には、ホンジャによく似た「世引き」という狂言がある。(中略) 四人が「踊て帰ら」と「かぎやで風」に乗って、五穀を紐にかけエイヤエイヤとかけ声も勇ましく引っぱって下手に入る。豊年の世を引くことと引っかけており、「世引き」という名前のよって来るところであろう。五穀を引く紐も竹富名産の紺地に白い緋を織り出したミンサー帯を使っているのも郷土色がよく出ている。これは民謡の節歌が讃歌として使われており、いわばホンジャのもどき、つまりホンジャのまねをしてより意味をわかりやすくする

パロディである。それだけに弥勒世果報（ミルクユガフ）を引くという意図も端的にでていているといえよう。

【矢野輝雄『新訂増補 沖縄芸能史話』〈1993・榕樹社〉】

・竹富島の豪農であった大山家の代々の主人には、琉球国王から位階が授けられており、『球陽』によると、1821年には、九十五才の大山^{ちくどうん}筑登之親雲上^{べーちん}に「勢頭座敷^{せどざしき}」の位階が授与されている。

「勢頭座敷」の位階は、いわゆるウザッシュ（御座敷）と言われるもので、元旦の儀式などでは、八重山の最高位の士族・頭役と同じ服装で参列することを許されていた。竹富島の歴史上、「勢頭座敷」の位階を貰った唯一の人物は、この「世曳き」に登場する大山の御主前^{うしゅまい}である。

この狂言では、大山の御主前が、子や孫たちを引き連れて、竹富島の神様^{ゆんちゆ}と与人役人に、豊作の報告をするとともに、ウザッシュの位階をいただいた御礼を申し上げている。

【全国竹富島文化協会編『沖縄県竹富島の種子取祭台本集 芸能の原風景』〈1998・瑞木書房〉】

・八重山諸島の竹富島で毎年旧暦九月か十月の甲・申の日から十日間行われる「タニドゥル」（種子取祭）の七日目に世持御嶽の境内の舞台上で演じられる。玻座間村（集落）で継承されている狂言で、毎年、プログラムの前半に演じている。

御主前（老人、翁の意）一人、二才二人、子孫二人が登場する。御主前が豊かに実った五穀を小車に積んで村頭や村の守護神にお目掛け、二才や子孫が踊って豊作の感謝をしようという内容である。首里方言で詞章を唱え、歌う。

【大城學『沖縄芸能史概論』〈2000・砂子屋書房〉】

・「世曳き」では長老一家が、こんなに豊作になったのでただ刈り取るだけでは済まない。車に載せて曳いて役人様にも神様にもお目につけよう、と曳いてきて供えて口説を舞う。仲筋村の「天使」は種子取の願いの日に、神か

ら種子と作り方を授かるものだから、世迎いと同じ性格だろう。「鍛冶工」の前に置けば見事に農事暦になる。

【上勢頭芳徳「種子取祭と人頭税」『人頭税廃止百年記念誌 あさばな』(2003・八重山人頭税廃止百年記念事業期成会)】

ユームチ タニマイキョウギン
《世持(種子蒔狂言)》

- 「世持」は種子を蒔き入れる狂言である。

「鍛冶工」「組頭」「世持」は一連のもので、連続して演ぜられる。「鍛冶工」で作製した農具を使って、「組頭」で開墾したところへ、「世持」で種子を蒔き入れるのである。

世持狂言は「世持」(種子蒔き役)一人、「村の子の部」(ムラヌファーヌベ)四人、計五人で演ぜられる。

「今日が日に 黄金日に 蒔く種や／犬が毛に 猫が毛に 根下い 元下い」という歌に合わせて、「世持」は種子を蒔き、村の子の部は鋤で整地をする。

【上勢頭亨『竹富島誌 歌謡・芸能篇』(1979・法政大学出版局)】

- この世持(種子蒔狂言)は、最初に、玻座間村の世持(村の責任者)が登場し、「畑を耕しておいたところ、恵みの雨が降ったので、最初に私の畑の種子を蒔き、つづいてみんなの畑に種子を蒔こうと思う。」と述べて、村の若者たちを呼び出す。

畑に到着すると、種子蒔きに当たっての(祝詞)を唱え、つづいて、歌いながら種子蒔きをする。そして、種子を蒔き終えた一行は、オナリ神の待つ我が家へと歌い踊りながら退場する。

【全国竹富島文化協会編『沖縄県竹富島の種子取祭台本集 芸能の原風景』(1998・瑞木書房)】

- 「世持」では村役人が登場して、先日は地拵えをしておいたところに良い潤いをいただいたので、組の者たちを連れて種まきに行く。願い口を唱え、種をまき終えて歌いながら帰る。仲筋村の「種子蒔」も似たような内容だが、種子まきの願い口を唱えて若者たちにここでも、役人衆が地拵えを良くする

ようにといつも言われているぞと説き聞かせる。まいた後は長く丁寧な神酒の願い口を唱え、しきた盆の歌を歌って退場する。

【上勢頭芳徳「種子取祭と人頭税」『人頭税廃止百年記念誌 あさばな』〈2003・八重山人頭税廃止百年記念事業期成会〉】

竹富島

《^{ウードゥ}大洞・^{クードゥ}小洞狂言》

・能狂言の囃子方には大鞆、小鞆、太鼓、笛がある。八重山では大鞆、小鞆のことを^{ウードゥ}大洞、^{クードゥ}小洞とよぶ。石垣市登野城には笛が欠落し、太鼓、大鞆、小鞆で演じられる芸能が残されている。竹富島の「大洞・小洞狂言」では大洞、小洞を打ち謡曲「高砂」が謡われる。別名「鳥かちみ狂言」というこの狂言には四人の男が登場し、結願祭に役人を鶏料理でもてなそうとし鶏を捕らえ祝宴では謡の「高砂」を歌う。鶏を捕らえるしぐさや、鶏といっしょに老婆も綱にかかるこっけいな様子を大洞、小洞を打ちながら「高砂」の歌詞を間違えたり口ごもったりし観客の笑いを誘う。これなども八重山の士族のみならず百姓の間にも謡など大和芸能の影響をみることができる。

【大田静男「琉狂言—琉球芸能の新視点—」『文学』季刊 第9巻 第3号〈1998・岩波書店〉】

《塩売り》

・かむり、黒紋付、広帯前結び、黒足袋、小刀、太刀もてる武士と、芭蕉布の着物、東からげ、天秤かついだ商人とが出る。やまと狂言「昆布売り」をなほしたもの。

【本田安次『南島探訪記』〈1962・明善堂書店〉】

《^{シバン}始番（アウジ狂言）》

・帽子、羽織、袴、黒足袋、杖、扇の支度の、白鬚、白眉毛の揃って背の高い老人たちが四人出る。狂言中に、鉢巻、黒紋付、袴、白足袋のもの、扇一本で御前風を踊る。つゞいて、かむり、襷、縞はゞきのもの、「ゆがふ口説」

を踊る。

【本田安次『南島探訪記』〈1962・明善堂書店〉】

・六山八山お嶽の神々に祈りを捧げた甲斐あって、五風十雨の恵により、豊年満作を戴いたので、その感謝をする狂言である。

長老四人が神前に感謝のことばをのべ、「新見船（アラミヨウニ）」を歌いながらユンタ巻踊りをし、子孫達に「世果報口説」を舞わせる。

【上勢頭亨『竹富島誌 歌謡・芸能篇』〈1979・法政大学出版局〉】

バイスコウダキョウギン
《南作田狂言》

・内容的には笑し狂言であり、形態的には演者一人の一人狂言である。内容は、〈南作田ま一なせ一ま・桴海どうぬま一びぎりょう〉と呼ばれる一人の篤農の男が、自らの財力をたのんで妾を探しに行く。その道中で美しい乙女と出会い求婚する。二人は乙女の親に許され、猫の子・犬の子が歡え、じゃれるようにして日を送る。そのうち時は流れて、篤農を誇った男の田畑は荒れ、牛馬は痩せ衰えてしまう。男はそれで目が覚め、家に帰り、家妻に自らの非を詫びる、というもの。

この狂言の重要性は、八重山の地狂言の一形態である一人狂言と、口承文芸ユングトゥとの関係がそこに顕現していることにある。本狂言と同趣旨のものが石垣島宮良では〈サクバルヌウヤミマーナシ〉というユングトゥになっているのである。ユングトゥは、滑稽な所作をともなう演者一人の芸能であること、また、それが笑いを目的として演じられるものであることなど、一人狂言とは形態的にも内容的にも重なりあう点が多い。ただ、ユングトゥは呪禱性が強いという点、注意が必要である。矢野輝雄によると、ユングトゥ〈内原ほ一ちゃ〉（石垣島川平）、〈西ぬ山から〉（同島大川）は本土の狂言小舞「兎」の一節を翻案し、織り込んだものという。このように狂言とユングトゥとの関係には看過できないものがある。近年、ユングトゥを〈一人狂言〉と規定する見解もあらわれており、ユングトゥ論の一つの焦点となる可能性がある。

【波照間永吉「南作田狂言」『沖縄大百科事典』〈1983・沖縄タイムス社〉】

ンブ
《芋掘》

・姉さん冠りの女二人（もと男が女装した）芭蕉布のきもの、襷がけ、前掛、白足袋の支度。鉢巻、着物、角帯、つぼん、白足袋の男、両方に藁で編んだ籠を下げた天秤をかつぐ。

【本田安次『南島探訪記』〈1962・明善堂書店〉】

・結願祭の時に供える食糧を準備するために、「芋掘りをする」狂言である。芋掘りをする人二人（女）、それを運ぶ人一人（男）、計三人で演ぜられる。いろいろな風刺をまじえて人を笑わせる喜劇である。

【上勢頭亨『竹富島誌 歌謡・芸能篇』〈1979・法政大学出版局〉】

あーりぐみ
波照間島（東組）

イシバンコンギ
《一番狂言》

・この狂言と竹富島の「組頭」とがよく似ていることがわかんと思います。つまり「上々から乞い給らる事や……」とって荒畑の整地をして芋畑の準備もし、世願いの余興の準備もやろうという内容になっており、兄が若者を呼びだして「上々から乞い給らる事や……」と、また同じ台詞をくりかえすというスタイルになっております。登場人物も五人で「組頭」と同じです。台詞のくりかえしは、農事指導が徹底させられていくように意図された表現方法であることは前に述べた通りです。

【石垣久雄「八重山嶋農務帳」にみる人頭税時代の農民統制—祭事芸能を中心として—】

『石垣市史のひろば 第10号』〈1986・石垣市〉】

波照間島（西組）

イシバンコンギ
《一番狂言》

・波照間島の七月世願を控え、祝儀の踊り狂言の準備をしながら、兄方の励まして若者たち唐鍛冶や大和鍛冶が、打ち鍛えたヘラで農作業にいそしむ

さまをユニークに演じ、会場を沸かせた。

【「市文化協会 4地区の狂言を紹介」『八重山毎日新聞』1997.9.8】

鳩間島

ピラ 《籠》

・男一人で演じる。支度は、芭蕉着を着け、裾をたくしあげる。藁綱でたすき掛けをする。裸足。右手に籠を持っている。下手から登場し、舞台中央前方に立って、一礼して祝言を唱える。(中略) この狂言には、次のような伝承がある。

むかし、首里から〈浜崎〉と名のる農夫が鳩間島にやって来て、農業を始めた。島での農業といえば畑仕事しかないが、浜崎の仕事は順調で、農作物は豊穰であった。これは神のお力添えがあったからだといって、浜崎はその喜びをトゥムリウガンの境内でうたいあげた。それが〈ピラ狂言〉である。この狂言の祝言が首里方言で表現されているのも、浜崎が首里出身であったゆえんである。

ということである。

【大城學「鳩間島の祭祀と文芸—結願祭を中心に—」『沖縄文化研究10』〈1983・法政大学沖縄文化研究所〉】

・「鉦」狂言も勤労によって芋の豊作をもたらしたことを自慢する筋。「浜崎という者だが、我れ一番と思ひ(ママ)(畑)に出てみると村頭始め皆様が早々とお出でになっている。我々が作った甘藷は干潟の蟹が穴を掘って盛土してあるように見事な出来栄である。掘ってみると三歳なる馬の陰茎に似て見事なものだ。村中に自慢し村人たちにも作らせよう。そのため甘藷のかずらを刈って行こう」と、最後は三味線の伴奏に合わせて踊りながら「若き頃は腰も痛まずにいたのにこの年になってしまった。今日はどうしてこうも面白いのか、焼酎も出して飲んで遊ぼう」という。これは芭蕉着物の裾をたくしあげ、藁でたすき掛けをし大きな鉦を持ち一人で演じ、甘藷の実りを喜ぶ百姓の姿が生き生きと演じられる。

【大田静男「琉狂言—琉球芸能の新視点—」『文学』季刊 第9巻 第3号 (1998・岩波書店)】

・「ピラ狂言」の由来などについて古老の話をまとめますと「およそ二百七・八十年前に、首里から濱崎と名のる農夫がやって来て、島で農業を始めた。そして農作物が豊穰であったことを、神のお力添えがあったとし、喜びの気持ちを神の前（御嶽のイビの前）で詠みあげたが、それがこの狂言である」という。

首里方言で表現されているのもその由だという。この狂言を演ずる者は、男子で、ひとりで演じますが、舞台の中央に立って狂言の文句を謡み、それを終えると「マミドーマ」を踊ります。

狂言を謡みあげる時は、芭蕉布の着物を着て、帯はワラ綱で裸足、そして手にはヘラを持つという身なりですが、マミドーマを踊る時は、着物をたくしあげ、タスキを掛け、はち巻をします。

「ピラ狂言」を一番狂言と言っておりますが、多分、初番狂言と同じだと思います。

演ずる者は、特に決まっておらず、村の男子であればだれがやってもいいことになっています。

【宮良安彦「ピラ狂言（鳩間島）」〈宮良安彦ノート〉】

3、与那国町

与那国島島仲村

《ウブンダー》

・ウブンダーは、プログラムの初めに演ずる祝詞狂言で、四ヶ部落にあります。五穀豊穰を祈願する台詞を口上します。座平しを終えて、ナナチカニン（打楽器演奏の種類）で登場します。スギン衣装を着けて広帯をしめ、白足袋をはいてハチマキ帕を被り、白い口ひげ、長いあごひげを垂し、長者によそい、杖をつき、右手の扇子を上げて、扇ぎながら舞台中央に出て、ひざまづきし

て拝礼し、台詞の口上をのべます。そのとき台詞の一句毎に、頭の上に合掌して拝礼する。口上が終わると、幕裏の三味線で立って、かぎやでい風の下句の歌に合わして7番句を扇子で招き呼びながら退場する。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988・与那国町教育委員会)】

与那国島祖納西村

《ウブンダー》

・ウブンダーは、プログラムの初めに演ずる祝詞狂言で、四ヶ部落にあります。五穀豊穰を祈願する台詞を口上します。座平しを終えて、ナナチカニン（打楽器演奏の種類）で登場します。スギン衣装を着けて広帯をしめ、白足袋をはいて帕を被り、白い口ひげ、長いあごひげを垂らし、長者によそい、杖をついて右手の扇子を上げ、あいづちしながら舞台中央に進み出て、ひざまづきし、拝礼して台詞を口上します。そのとき台詞の一句毎に、頭の上で手を合わせて拝礼するのが特徴です。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988・与那国町教育委員会)】

ウヤキ ベーチン 《金持親雲上》

・世間に知れ渡った金持親雲上は、祝座に行くので、留守番を宮城と加那(ママ)のみ人に固く頼んで出かけます。

宮城は腕白者で、加那は正直者であり、2人の性格は対照的であります。

宮城は留守番どころか、先祖代々の家宝の茶碗を叩き割り、砂糖瓶も叩き割って砂糖を食べ、自分のやり放題にします。やがて親雲上は帰宅し、その有様を見てひどく怒ります。宮城はわざと自分で叩き割りながら、加那のせいにし、その罪をなすりつけます。親雲上は自分は遊んで来たということに、すぐ気を取り直し、罪を許します。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988・与那国町教育委員会)】

・金持親雲上が祝いの宴に行くというので、下人の宮城と加那に留守を言いつける。その時特に戸棚の上の茶碗は宝の茶碗なので気をつけるようにと

言づけて出ていく。すると、宮城は、加那をそそのかして、その大事な茶碗と、その下にあった瓶を叩き割って、主人がいつも毒が入っているといた瓶のなかの砂糖を食べてしまう。そこへ金持親雲上が帰って来る。すっかりしょげ返っている二人を見て、その理由を聞くと、相撲を取っているうち、大切な茶碗と瓶を割ってしまった、という。実は、この次に、それで毒を舐めて死のうと思って、瓶の毒（実は砂糖）を舐めたが、まだ死なない、という所があったはずだが、これがなくなっている。結局親雲上は許してしまう。

これは小名狂言の「毒」を琉球の狂言に移したものである。本土の狂言では、壺のなかの砂糖（当時は固形ではなく、水飴のようにになっていた）を毒だと欺いて預けた主人の留守に、太郎冠者・次郎冠者の二人の家来が、大事な道具をわざと壊して、まんまと砂糖を舐めてしまう、という筋である。こういう形で、与那国の狂言の中に、「毒」があること自体驚きである。芸能の逞しさ、不思議さをまざまざと見せつけられた思いがしたものである。

【池宮正治「八重山芸能の^{シタジ}下地」『八重山古典民謡 大浜安伴・みね顕彰公演』〔パンフレット〕（1988）】

《^{タゲトイ}蛸取り狂言》

- 平得村の松ッアは、親戚のおばさんの家に結婚式があった。自分は蛸取りに勝手があり、また、上手なので蛸取りに行かされた。いつもの蛸の穴を手初めに、あっちこっち廻った。そして蛸を見つけ蛸をしとめた。喜び勇んで持ち帰り結婚式のトンダンボ（花嫁家に持参する儀礼の御馳走をつめる容器）の上に、赤、黄色に染めてはわし、飾りつける事を意味した狂言である。

- この狂言は一人で演ずるので難しい。蛸を相手に話しかけ、蛸をしとめる演技や、獲物を担いで唄をうたいながら帰宅する演技が特徴であり、どの座でも気軽に演じられています。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』（1988・与那国町教育委員会）】

《^{ナラムラカナ}那良村加那》

- 那良村加那は、在番役人宿舎へ食料品を届ける使役に出された。

食料品と書付けを受け取り、天秤棒で担いで出かけます。途中坂道を夢中に登りきったので、食料品を落としたのではないかと、不安でたまらない。加那は品物と書付けを照合しようとするけれども、字が読めず困った。そこで通行人を呼び止め、品物と書付けを照合してもらうようお願いする相手との、取り合いを演じたものです。その相手とのやりとりがこの狂言のポイントです。この方言は石垣の方言で演じますが、下手な方言を駆使して演じるのに妙味があって面白い。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』（1988・与那国町教育委員会）】

^{バングト}《願事の狂言（平川親雲上）》

- 平川親雲上は、沖縄下りの寄留者であり同志マカローは、島仲村でこのたびの村行事に出演させるために稽古中の芸能を見学します。そしてその様子を平川親雲上に克明に報告します。平川は那覇の士族の生れであると云う面目を保つため、寄留者同志を集めて、石垣主たちに負けまいと芸能を企画します。

- この狂言は西部落の一番狂言といわれ、古くから祭事等に演じられ継承されています。狂言はその時世のバロメーターと云われますが、沖縄や石垣の寄留民、または各種団体が民俗芸能に対し全力を注ぎ競い合った、その社会背景がうかがえます。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』（1988・与那国町教育委員会）】

^{マスタテイ}《塩炊てい狂言》

- この村に塩炊き夫婦がいた。2、3日前まで続いた雨もあがり、今日は天気もよく塩炊き日和なので、妻に弁当を頼んで朝早くから塩炊にでかけた。頑張ったので疲れた。一休みしているところに妻が弁当を持って来た。食事しながら2人は話していますが、些細な言葉のずれから喧嘩となり、妻は怒って、離婚を強いられた夫は困ってしまう。

そこでたまたま通り合わせた、友人は2人の喧嘩の仲裁に入り、昔からの教訓を取りあげて比喩し、更に教訓歌「でんさ節」を唄って諭す。

夫が勤勉であっても、家計をあづかる妻が節約し、自制しないと、家庭は

繁栄してこないことを戒めた狂言である。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』〈1988・与那国町教育委員会〉】

^{ンマチリ}
《馬連りタマ》

・馬連りタマは、近々行われる競馬に、我が馬を出場させるので、馬の手入をし、草刈に出かけます。

子供たちに草刈をさせるのも気に入らず、さりとて自分一人で行くのも寂しいので、前の筑登^{チクドン}之を呼んで出かけます。道すがら峠を登り2人で楽しく歌っていきます。やがて、山一やヤクミー、マヒー達と一緒に^(イヤ)なり囃して歌い行きます。山一は、腕白者でよその畑から芋かずらを盗み、畑主が注意するのも聞かず、鎌で叩き切るといって喧嘩になります。驚いた皆の衆は山を下りて帰宅します。山一は一人残され、草を担ごうとしたら、カマキリが草の中にいるのでまたこのカマキリとも喧嘩します。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』〈1988・与那国町教育委員会〉】

与那国島祖納東村

^{アサカンテイ}
《祖父捨て》

・我が家の祖父は心のやさしい祖父で、毎日三度の食事も好き嫌いなく腹いっぱい食べていた。ところが、近頃では老人ボケで、差しあげる飯に、あれこれ文句をいい、ついにご飯をひっくり返し、あげくのはては、家の道具など割ったりして始末におえないので、友人を頼み、祖父を東崎につれていき、海に投げ捨てようと押し問答しているところに獅子が現れて、かみついできた。孫は自分の非をわびて獅子に帰ってもらい、祖父をお供して家にもどり、一層孝行にはげんだという。

・姥捨て山昔ばなしを仮定した狂言だろうか。即席でユーモラスに演じ得るので、人気がある。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』〈1988・与那国町教育委員会〉】

《天川狂言》

• 昔、先祖代々からの言い伝えによれば、天川の水を浴び続ければ、老いた者は若くなり、若い者は老者になるといわれている。今日は太陽も美しく、
 天気が良いので、天川築殿は、若者達を呼び集めて、天川をお見舞いした。
 たらいに水を入れて置き、数名の若者たちは木の枝でたらいの水をふりかけ、
 うるぎさんあゆい、からぎさんあゆい、ふふーふふーとたらいの周囲を回り、
 ユーモラスに演じる。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988・与那国町教育委員会)】

《石かま狂言》

• 石かま家の下男、サクヌカアラは、友人のシマクンティラーヌカを、田んぼ仕事にさそって出かける。道すがら、アラは、島一番の剛力、親雲上（金城按司）を討ちとり、地位、家財を我がものにして大福人になることをヌカに話しかける。ヌカも前々から同じようなことを考えていたとあって、アラの意見に賛成した。そして2人で親雲上の邸宅を視察し、その邸宅の豪華なことにますます敵意をもつようになった。

一方アラとヌカの策謀に気づいた親雲上は、彼等が攻めて来るのを、城間に待ちかまえて取りおさえる戦略をたてる。アラとヌカは鎌をふるって親雲上邸宅に乗り込み戦をいどむ。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988・与那国町教育委員会)】

《ウブンダー》

• ウブンダーは、プログラムの初めに演ずる祝詞狂言で四ヶ部落にあります。五穀豊穰を祈願する台詞を口上します。座平しを終えて、ナナチカニン（太鼓、銅鑼、笛の演奏の種類）で登場します。スギン衣装を着けて広帯をしめ、白足袋をはいて、帟を被り、白い口ひげ、長いあごひげを垂らし、長者を装い、杖をついて右手の扇子を上げて扇ぎながら舞台中央に進み、座って、拝礼して台詞を口上します。台詞の一句ごとに、頭上に合掌して拝礼し7番が終わると、かぎやで風の三味線で立って歌に合わせて退場します。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988・与那国町教育委員会)】

《うむいとうがに》

・うむいとうがには、主ぬめーが、大和旅に出かけているが余り待ち遠いので十山お嶽に旅行の風願を祈願するため、供物の焼酎をさげて出むく途中に、加那と逢い、いっしょに道行して、辻、仲岳に行く。放蕩者の加那は家畜の草刈をいいつけられたにもかかわらず主人の着物で身を飾り、首里の町全体の胃袋をまかなっている倉庫を七つ持っている出費役と豪語して、主人の肩書を名のり、辻、仲岳遊郭に10日も20日も道楽にふける。たまりかねた主ぬめーは加那を探しあて、せっかんする様を演じている。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988・与那国町教育委員会)】

ウンティンドウヌティン 《運天殿内》

・私は上層の家柄に生まれた。運天殿内のかり屋の筆者である。このたび大和旅を3年もして、教養もつんできた。

明日明後日、うさくらいなので御馳走や肴は準備したけれども、刺身にす
る魚が不足しているのので、主ぬめーは三良を呼んで、君は海が達者だから魚
をもってきなさいといいつけた。三良はほめられて気を良くし頑張って、ガー
ラ、ターマンと色々な魚をたくさんしとめた。主ぬめーは欲張り者なので取っ
た魚を、^(ママ)遊具費に当てるためにわけて隠しておき残りを持っていった。

三良は疲れなおしに焼酎を請求しますが、主ぬめーはお酒はいつも飲むも
のではない、祝いや交際場で飲むものと論ず。心得ていた三良は隠した魚
を持って、辻、仲島に女郎遊びに行く。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988・与那国町教育委員会)】

ソーダヌウブス 《長者の大主》

・ソーダヌ大主は、ウブンダと同じ種類の祝詞狂言であって、七つ鐘の伴
奏にて出場します。長者に装い杖をついて扇子で招き舞台中央に座って、五
穀豊穰を祈願する歌詞を口上します。

口上が終ると、子、孫を呼び出して舞台の両方に座らせて、空手や踊を披
露します。弥勒の演出に似た内容で演技します。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』〈1988・与那国町教育委員会〉】

チュンジュンナガレ
《仲順流れ》

• 私は、3人の男を産み育てた。今では、それぞれ孫もできて満足している。
最近、私は年もとって歯も落ち、食物も満足にとれなくなったので、まず長男を呼んで聞いてみた。

“お前の乳飲み子を畑に穴を掘って埋め、妻の乳を自分に飲ませて養ってくれないか”長男は“父さんは、これだけ生きてきたので十分である。幼い孫を殺してまで命をながらえようというのはもってのほかだ。死ぬのならば勝手に死ね”とはねつけた。

つぎに、二男を呼んで聞いて見たがやはり同じ返答であった。

最後に三男にたずねると“子供は産み替えはできるが、親はできないので親のいわれるようにします”と行って子供を畑につれて行き、穴を掘って埋めようとする。すると、穴の中から金銀、サンゴの宝物がざくざく出て来た。そこで父親は、“私が難題をふっかけたのは、お前達の心を試すための計謀であった”と打ち明けたという。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』〈1988・与那国町教育委員会〉】

《トゥーシュヌ大名》

• ひまをもて余した、^(マ マ)トゥシュウの大名は、前の蒲戸を呼んで狩にでかけた。一方、チュジョウ人は、主人に急用をいいつけられて読谷山へ急いでいるところを、大名にむりやりに引き止められて、道連れを命じられる。聞かなければ弓で撃ち取るとおどしたてる。チュジョウ人は仕方なく大名のいうなりに、大名たちの、荷物や弓矢などをもたされてお供します。大名たちは陽気になり、歌をうたって歩いているが、武器の弓矢を身からはなしたのが運のつきで、今度は逆に、鳥や犬などの鳴きまねをさせられ、聞かなければ弓で撃ち取るとチュジョウ人の云いなりにもてあそばれる。大名は武士の面目まるつぶれとなげき、チュジョウ人は今日はよい儲になったという。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』〈1988・与那国町教育委員会〉】

《トゥダナ》

• 主ヌメー一家は家を普請し、内外装とも申分なく飾りつけたが、梅の花一つが不足していた。

主ヌメーは、放蕩者の加那に、アヤメーから銭をもらって梅の花を買ってくるようにいいつける。

アヤメーは加那に銭を渡すことを嫌うが、しかたなく銭を渡した。銭をせしめた加那は、辻の遊郭に泊り込んで放蕩にふけて銭を使い果たした。

そこで、加那は、頓知をきかせて、主ヌメーの昔の恋人のカミジャーやウサグーたちとあってきたことを言葉たくみに報告して、主ヌメーの機嫌をうかがう。主ヌメーは加那の甘言にのって、梅の花のことなどコロッと忘れて悦に入ったという。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988・与那国町教育委員会)】

《ドゥナイドゥ》

• 1 幕 ンネーと連呼して舞台に登場した、遠見番人が船の入港を知らせる。女たちは、船の入ることを喜び、お酒を差し上げる。

2 幕 ドゥナイドゥの唄で登場した2人の女は、ドゥナイドゥ(船の模型)を引張って演じ、幕に入る。

3 幕 続いて、サディとトゥディ(船員)が登場し船の出港の模様を演じ、ドゥナイドゥを引き、トグル岳を唄いながら幕に入る。

• 与那国町367番地には、昔から伝えられている、ドゥナイドゥと云う船の模型が保管されている。昔この屋敷より西方一帯は、造船所があったと伝えられている。帆船時代の旅の行き来は、命がけのわざであったので、海上安全を祈願する、芸能や数々の歌謡が生まれた由縁がうなずけられる。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988・与那国町教育委員会)】

《ドゥングトゥ (読み唄)》

• ^{シテマツリ}節祭の御馳走をたくさん準備したところ、刺身にする魚がないので、公民館長から魚取りをいいつけられた。

若者2人は、サンヌ台の釣場に行き釣糸を投げたら大きな魚が掛かった。

喜びいさんで大きな魚をたぐり揚げる様子をドゥングウトゥの拍子にあわせて、ユーモラスに演じている。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988・与那国町教育委員会)】

《大蒜植え》 ヒルビー

・明後日、村祭があるので、正一は友人の兄貴を頼んで整地しておいた四反歩の畑に、大蒜を植えて村祭を見に行くことにした。2人は唄をうたいながら大蒜を植えていたが、ふとふり向くと、兄貴は「フー出でり、花出でり」と呪文をとえると、ついに宝物の出る瓶をさがしあてた。利口者の正一には主人なしで仕事をするかしこい手がいた。正一は、兄貴をだまして、自分の手と宝物の出る瓶を、まんまと取り替えた。

兄貴は、手に突き飛ばされ、どじをふんだという。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988・与那国町教育委員会)】

《福人》 フクデイン

・俺は福人里主である。下男の加那、カミジャー、三良の3名はこの間、宝物を探したようす。1人が俺のものといえばあとの2人も我がものといい、あいゆづらず、仕事もしないので里主は3名を呼んで1人に決めることにした。君らは宝ものを探したそうだがだれが先に探したのかとの問いに対し三人とも俺がと答えた。そこで里主は質問をした。君等は何月何日何の日に生れたかとの問いに対し、加那は木の葉の間から生れた、カミジャーは海の潮のトナダから生れた、正直者の三良は火と水と一緒に生れたとそれぞれ答えた。里主は三良に決めたいけれど後の2人は不服だといって奉公をことわって出ていった。里主はこの宝物と言うものはどんなものかとの問いに、三良はこれを叩くと美女たちが打ち連れて踊る宝の太鼓だといって叩いて踊ったという。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』(1988・与那国町教育委員会)】

《若大名》

・若大名は度々狩に行かないと気がすまない。ところが一人でいくと寂し

いので宮城ヒダーを呼んで出かけた。彼方此方廻るうちに、上方のあたりに、曲芸をしている旅芸人にあった。大名は宮城ヒダーに、その動物を買って来いといいつけた。しかし芸人のウフデーは、この動物で生計をたてているから差し上げることは出来ないといつてことわると大名は裏表まで射飛ばすぞと怒りますが、動物の芸を見ているうちに心を取り直し、見せ賃として自分の洋服を与えた。宮城ヒダーも煙草入れをあげた。大名達はこのような動物さえも踊りはねることも出来るので自分のように権威のある大名は踊りはね、歌をうたって帰ることにした。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』〈1988・与那国町教育委員会〉】

《^{ンマ}馬マサ（^{ンママーシャ}馬廻者）》

- 棕櫚のものかむり。白の上衣にづぼん、襷、縞はばき、黒足袋のもの、馬乗風に馬の首を前につけ、手綱を持ち、舞台の中央に出て、早口に誦事がある。終りに「ハッハッ」と入る。

【本田安次『南島探訪記』〈1962・明善堂書店〉】

- ワッフワッフと言いながら太鼓を叩いて登場する2人はどんな鳥だろうか。つぎに登場して童謡を唄う鳥は「とーくで御殿の木々にピュララピュンピュン」と囀えずる小鳥たちの光景を表現している。つぎにハイダダと言いながら登場する馬マサは早口で、まくしたてる「棚原ヒャッカー」は荒馬を左右に引き回し巧みにあやつっている様子を演じている。

- この狂言は、擬人体で演じている。

与那国では、たいした用事もないのに、他人の家を徘徊する者を「馬マサ」と渾名している。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』〈1988・与那国町教育委員会〉】

与那国島比川村

《アブデー》

- アブデーは、プログラムの初めに演出する祝詞狂言で、四ヶ部落にあり

ます。五穀豊穰を祈願する台詞を口上します。座平しを終えて、七^{ナナ}ち鐘^{カニン}（打楽器演奏の種類）で登場します。黒足袋をはいて帕を被り、ひげを垂し、長者に装い、杖を両手に握って強くつき、舞台に座って拝礼して台詞を口上します。口上が終ると、かぎやでい風節で退場しますが、この時にはじめて団扇を持ち招きながら9番目の句を招き呼びながら退場します。

【与那国町教育委員会『与那国島の祭事の芸能』（1988・与那国町教育委員会）】

ンディマチリ キングイ 《比川祭の狂言》

• 祭司たちの慰労の宴がある。この折参会者一同がどっと笑ひくづれる行事が少なくとも以前はあった。今もあるかどうか。かういふ資料は、実際の祭に当たらないとなかなか得にくいものである。与那国滞在中は耳にしないうでしまったのだが、のち、竹富島の前新加太郎氏のお話に、今より二十年前、同氏がまだ与那国島で小学校の先生をされてゐたあるとき、祖納の「前はな」といふ家で行はれたこの精進上げの祭に招待されたので、出かけ行ったといふ。式次第があり、やがて祭司たちに神酒がまはる段になると、酒をつぐ者が、つかさにささやいていふ。「あなたはゆふべだれとねました」つかさ「それは言へない」「でも言はなければなりません。神様のおいひつけです。ないしよで私にだけ話して下さい」「それではあなたにだけ話ませう。実は何某とねました」「いやありがたう」。それから酒つぎの者は、場の中央に出て、「今〇〇つかさからいいことを聞いた。ないしよにしてくれといふことだったがそつと御披露申さう。それは、〇〇つかさは、ゆふべ何某とねたさうだ。」

その何某といふのは、むろんおもいひつきの人の名である。満場はどっと笑ひくづれて拍手かつさいする。かうして次々と、つかさに男の名をいはせる。だれの名が口にのぼるかとは皆は聞耳をたてる。この折、その三番目のつかさが、突如前新氏の名を言つた。ねたといふつかさは、むろんはじめて顔を見るつかさである。前新氏はまだ先生になりたてのいはゆるニューフェイスであり、みなからどっとはやされて、まっかになり、すでに立ち上って、抗議を申し込まうとしたが、周囲からしきりに袖をひかれ、これは根も葉もないことをいふといふことが皆にわかってゐるのだからとなだめられ、ぢり

ぢりしながらそれなりにやんだといふ。この祭を、「アサカザイ」といふが、そののち招待されることはなかつたと語ってをられた。

【本田安次『南島探訪記』(1962・明善堂書店)】

・アンタドゥミには現在ンディマチリのみで行なわれる狂言がある。部落の青年役員二人が各々すすきを差した瓶とバタティをもち、ツカサに対して「昨夜ツカサとドウムンティは楽しい思いをしたでしょう。それを教えて下さい」と語りかける。かつてはマチリを行なう者達はトゥニにて夜をあかしたので、そこに共にいたツカサと部落長であるドウムンティとの間をひやかすのである。これに対してツカサが「昨夜はドウムンティと浜で楽しく過ごした」などと答えると皆でどっと囃したてる。この儀礼については多様な解釈が可能であろうが、すすきが米の豊作祈願として使われるところからも、ツカサとドウムンティ（「世持ち」の意で、かつてはこの者の力が部落の繁栄を靈的に支配すると考えられた）の力によって、豊作をもたらそうとする一種の農耕儀礼と考えられる。特に二者の間の性的関係を表現することは、そこに込められた「生み出す力」によって与那国の豊穰を叶えようとする行為であると理解できる。

【植野弘子「与那国のマチリと祭器祭祀」『まつり』37号 特集・与那国島】

・比川マチリだけで披露される「狂言」は子孫繁栄を象徴する内容で、二人の若者が司や公民館役員に男女の秘め事について話を交わした。マチリ終了後、参加者は輪になって巻踊り（ドゥンタ）を踊り、喜び合った。

【『琉球新報』2002.12.23】

・先日、ンディマチリの祝賀会に同席する機会を得た。むかし天女が降りてきたとき、それをもてなしたという、泊家の座敷が祝宴の場である。ここでもツカブは上座に着座し、各儀礼をなすが、なかでも献杯のため参列者にはさまざまな盃がまわされるのが面白い。

特に、「ムクダラ（婿皿）・ドゥミダラ（嫁皿）」と呼ぶ、対になった盃は、ンディマチリにこそふさわしい。それはンディマチリが俗に「ムクスイ（婿

取り)・ドゥミスイ(嫁取り)の願い」といわれ、主に子孫繁盛・家庭円満を願うからである。

それに祝宴の終盤になって演じられるキングイ(狂言)は、一見滑稽味を前面に押し出しているようでも、婿取り・嫁取りのテーマに沿い、往時の風俗を示唆する内容であった。このキングイがンディマチリのみで演じられ、それが定番であることから、祭祀のテーマをより際立たせ強調しているようでもあった。

【飯田泰彦「ンディマチリ」『琉球新報』2003. 1. 6】

・「夕べ誰と寝たのか」。二人の若者が、こんなきわどいことを、神女に問いかける狂言がある。この狂言は与那国島の「嫁取り・婿取りの願い」を主題とする比川祭で演じられる。このような内容の話題は、よく卑小になりがちであるが、祭祀という場で決まった歌謡や所作を伴うことによって、儀礼としての役割もしっかり果たしている。

登場する若者の一人は、酒器を持ち、それにススキを挿している。もう一人は神酒の入った一升瓶にダンドクの花を挿している。主題に寄せてススキの生命力から子孫繁盛を読み取るなら、同様にダンドクの花に意味を見出しでもよい。

【飯田泰彦「ダンドク」『琉球新報』2003. 2. 1】

与那国島

《ユタ廃席》

・遊女通いし酒浸りの主人、夫の行為を嘆きユタ買いする妻に長男を加えた“家庭騒動”を四人の出演者が演じる狂言。

【「与那国の狂言を一堂に一7日に発表会」『八重山毎日新聞』1989. 12. 14】

《無情大学》

・父と若夫婦の貧しい家庭の中で大学進学を希望した夫に、父親と嫁が働いて学資を送って望みをかなえさせてやるが、夫は別の女を連れて帰ってくる。父親の質問に息子は「これからは学問もできる学識者や偉い人と付き合

うので、無学の妻は捨てて、この女を自分の妻にした」と言う。これに父親と嫁は「いままで苦労したのは何のためか」とカンカンになって怒り、嫁は家を出る。悪いことに夫は病いにつき、新妻も離縁して帰ってしまう——と世の浮き沈みや人間の倫理観を説いた狂言で、会場を大いに沸かせた。

【田頭政英「12の“キングイ”を披露—初の狂言発表会開く—」『八重山毎日新聞』

1989.12.19】

(いいた やすひこ・沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員)